

Re:魔神と始める異世界生活

銀の巨人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十戒によって殺されたメリオダス。死後、煉獄で父親の魔神王によって蘇りブリタニアに戻って来たと思いきや、その地はブリタニアではなかった。

リゼロの小説は9巻から読んでます。アニメの続きが気になって小説を買ったという感じです。

七つの大罪はコミックを全巻読んでいます。マガジンは読んでいませんが、気になって読んでいる時もあります。

※語彙力皆無、恋愛、戦闘書くの下手。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
62	60	56	54	51	49	47	44	42	38	35	33	30	27	25	20	18	15	13	11	9	6	4	1

第47話	第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	闖級設定	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話
137	134	130	126	122	119	115	110	107	105	99	95	92	89	86	84	82	80	77	74	71	69	65

第1話

オレは煉獄でオヤジに感情を喰われ・・・呪いによって蘇った。だが、蘇った先がブリタニアではないことは、まだ知る由もなかった・・・

辺りは木々で覆われた森、人の気配は無く聴こえるのは葉が揺れる音のみ。

「さてきてきて、ここは一体何処なんだ？ 木ばっかで全然わかんねえな・・・少し歩いてみるか」

数時間、この森を適当に歩いていると、広い草原が見えた。

「随分と広い所に出たな。ん？ これは・・・」

見つけたのは何を通ったような足跡だった。

だが、この足跡は馬ではない事にすぐ気づいた。

「こりや何の足跡だ？ 馬でも豚でもねえ・・・それにこの車輪の跡からして、人が乗っていたに違いない」

つまりこの足跡を辿れば、いずれ人、いやそれどころか町に着けるかもしれない。

オレは期待に胸を膨らませてその足跡を辿った。

「おつかしいなあ、全然人も町も見えて来ねえ」

あれからまた数時間歩いているが一向に何も無い草原があるだけだった。

辺りはすっかり薄暗くなつて足跡を辿るのも困難になつてきた。

道中、鳥や動物は何匹か見掛けたが、どれもブリタニアでは見掛けない動物だった。

「ああ、酒が飲みてえなあ・・・」

そんな愚痴をこぼしながらも町を目指して歩いていると、一本だけ他の木とは比較にならない程の大樹がそこには立っていた。

「なんだこの大樹は。実際には見た事がないが、妖精王の森の大樹よかあるんじゃないか？」

この大樹を見上げながらそう呟いた。

「その坊ちゃん、ここで何をしているのかーあな？」

すると、どこからともなく一人の男が話し掛けてきた。

その見た目は奇抜で、顔にピエロの様な化粧を施した高身長のだ。

「あなた、誰だ？」

「おやおや、私とした事が挨拶をしてなかったね、失敬失敬。私の名前はロズワール・L・メイザース、ちよつとした領主をしている者だーあよ」

ロズワール・L・メイザースか、珍しい名前そして格好だな。祭りでもあるかのような見た目だ。

領主という事は少なくとも近くに村があるという事だよな。

「オレはメリオダスだ。よろしくな！　ところでロズワール、何個か聞きたい事があるんだけど」

「おお、私の広大な脳でわかる範囲でなら、何でも聞いておくれ。何が知りたいんだーあい？」

「ここは何処なんだ？」

「ここはヘルグニカへのフリューゲルの草原へちなみにこの大樹はフリューゲルの大樹だーあよ」

ルグニカ・・・か、やっぱブリタニアじゃないんだな。

そうと分かれば・・・

「次の質問、ロズワールはブリタニアって地方を知ってるか？」

「ブリタニア・・・悪いけど私にも知り得ない地名だねーええ」

なに？　という事はここからブリタニアはオレが想像しているよりも遙か遠くにあるのか？

「あの一メリオダス君？　もし帰る場所が無いのなら我が屋敷に泊まっっていくかい？」

「ありがたい話しだが、いいのか？　こんな得体の知れない奴を屋敷に招待して」

「ここで会ったのも何かの縁だーあよ。それに君の話も聞きたいしねーええ」

「そんじや、世話になりますかな！」

とりあえず今のところロズワールは悪い奴ではなさそうだ。口調
や見た目はあれだけどな。

第2話

オレはロズワールの乗ってきた竜車と呼ばれる乗り物に乗り、ロズワール邸に連れていってもらった。

それにしても、この地方では馬じゃなくて地を這う竜に乗ってるのか、何か新鮮だな。

それにさっきから風の抵抗が無いかのように感じる。

「メリオダス君。今度は私が質問してもいいかーあな？」

「なんだ？」

「君は一体何者なんだい？ 明らかにただの迷子の子供では無い、何か禍々しいものを感じるよ」

その通り、俺は人間じゃない、魔神族だ。 だがどう伝えたら良いのか、ブリタニアを知らない遠くの地にあるとしたら魔神族の存在も知っているかどうかからん。

「まあ、人間じゃねえのはたしかだな」

「やっぱりね、最初に会った時から人間ではない事は気づいていたよ」
「ロズワール、そういうお前もただの人間じゃないんだろ？」

「まあね。私を人間と言っているのか、自身でも判断しかねるよ・・・」

そんな事を言っているとひとつの村が見えて来た。 結構な数の村人がいて、子供もそれなりにいた。

「ここは私が所有している村、アーラム村だよ。 いずれ君も行くことになるかもしれないねーえ」

「アーラム村か、やっぱ聞いたことねえ村だな・・・」

それにこんな建物、ブリタニアには無い。

そして地竜という生物、もしかしたらここはブリタニアから遠く離れた土地ではなく《別の世界》という可能性も出てきたな・・・ってそんな事ある訳ねえか。

村を抜けてしばらく竜車の中で外の景色を眺めていると、大きな屋敷が見えて来た。

「此処が我が屋敷だーあよ」

ロズワールは片手で屋敷を手で示した。

オレはあまりにも大きな屋敷に少し驚いていた。中に数十人、いやもしかしたら数百人暮らせるんじゃないかと言わんばかりの大きさだった。

「でっけえ屋敷だなく。　ロズワール以外にも何十人か住んでんのか？」

「いや、ここに住んでいるのは私を含め5人だけだよ。　今のところは・・・ね」

意味深な言い方をするロズワールにオレは首を傾げていた。

それよりもこんなに大きな屋敷なのにそれしかないのか、寂しいな。豚の帽子亭は狭いしうるせえ連中が揃ってたから毎日賑やかだったが、この連中はどうなんだろうな。

先行くロズワールの後ろをついて行って屋敷の敷地内に入り、玄関まで来て扉を開けたら

「お帰りなさいませ、ロズワール様」

いきなりメイド服を着た二人の少女がいた。

一人の少女は髪の毛が水色でショートヘアで右目に前髪が掛かっている、もう一人は桃色の髪で左目に前髪が掛かっている少女だ。

この二人は異様に似ているな、多分姉妹かなにかだろう。

「ただいま二人とも、留守番ご苦労。　こちらの子はメリオダス君、今日この屋敷に泊まることになったからよろしくねーえ」

「はい。　お客様、ラムです」　「レムです。　お客様」

「メリオダスだ、よろしくな！」

「二人とも、お客人に衣服を」

「かしこまりました」

確かに何時までも半裸じゃ完全に不審者だし何より寒い！

なのでロズワールの提案には助かる。

第3話

今はロズワール邸で晩飯をごちそうになっている。

見た事ない料理ばかりだが美味しい、バンといい勝負だ。

この料理は確かレムって子が作ったらしい。

「メリオダス君、うちの使用人が作った料理の味は口に合うかな？」

「ああ、こりやあ美味い！ 是非うちの店に来て欲しいくらいだぜ」

「それはよかった。レムをあげることは出来ないけど、メリオダス君は店をやっているのかーあね？」

「まあな、《豚の帽子》亭っていう酒場のマスターをやってるんだ」

「ほう、君は酒場を経営しているのか。まだ子供なのに立派な事だねーえ」

「オレはガキじゃねえぞ？」

「おっと、これは失敬。いきなり子供扱いは失礼だったねーえ」

完全に子供扱いしてやがるな・・・ロズワールが何歳かわからねえが、オレよりも長生きしてる奴なんてそうそういねえと思うんだけどな。

「それにしても不思議だーあね。君は、ルグニカ王国のメイザース辺境伯の邸宅まで来てなーあんにも事情を知らないってーえ言うんだから」

「今はまずい状況なのか？」

「穏当な状態ではないね。なーあにせ今のルグニカは王が不在なのだから。まあ、既に民衆にまで知れ渡った事実だーあけどね」

今この国には王がいないのか、変な話だな。

普通は代わりの王がすぐに就任するもんだと思っていたが、この国では違うのか。それとも何らかの事情で王が決まらない、もしくは決めている最中なのか・・・

「まあ、この話は明日にでもしようかーああ。そろそろ「あの方」が帰ってくる頃だろかーあらね」

「あの方？」

ロズワールの言う「あの方」とは誰か聞こうとした瞬間、さつきから姿が見えなかった、レムって子が扉を開けて出てきた。

「ロズワール様、エミリア様がお帰りになりました。怪我人を連れられている模様です」

「そう、ならベアトリスに怪我人の治療をお願いしなさいあい」

「かしこまりました。ロズワール様」

水色の髪のメイドはお辞儀をして部屋を出て行った。

「さて、私も様子を見に行こうかーあな」

食事を終えたオレはロズワールと共に別室へとやって来た。

そこにはメイド二人は居らず、その代わりに耳が尖った銀髪の少女と金髪でツインドリルテールの幼女と重態の男がいた。

男は意識が無く気絶しているようで、幼女が男の怪我を直しているみたいだ。

「えっと・・・あなたはだれ？」

銀髪の少女が俺に話し掛けてきた。

「メリオダスだ」

「メリオダスね、私はエミリア、よろしくね！」

「おう、よろしくな！」

「あ、そっちにいる子はベアトリス。仲良くしてあげてね」

エミリアは奥にいる金髪の幼女の方を指して紹介した。

「別に、仲良くされる謂れなんて無いかしら」

「もう、ベアトリスはすぐにそんな事言うんだから！ 気にしないでね、あの子ああ見えてすごーくいい子なんだから」

「ふむふむ・・・んで、あいつは誰だ？」

「それがね、私にもよく分からないの。名前はナツキ・スバルって言うらしいんだけど、いきなり私を『嫉妬の魔女』の名で呼んだり、助けてくれたりでわからないの・・・」

嫉妬の魔女？ またよくわからん単語が出てきたな。

それにしてもこの男の格好も見た事ないな。アーラム村の人達の服装とも違うし、共通性が無い。

「とりあえず治療は終わったのよ。血までは戻らないけど」

「すごいありがとう、ベアトリス」

「お前に感謝なんかされたくも無いかしら」

刺々しいベアトリスにエミリアはまだ心が折れていないようだ。

まさか、いつもこんなあしらわれ方されてんのか？

「とにかく怪我人の治療も終わった事だし、今日は皆眠るとしようかーああ。明日彼が起きたら話しをすればいいだけだしね・・・」

ということ、オレ達は明日に備えて寝ることにした。

第4話

昨日は死して蘇ったらブリタニアではない地で道化に会い屋敷に招待されたり、その夜、屋敷で重傷人が運ばれたりで大変な一日だったが、ブリタニアに戻る手がかりは無し。

オレは朝起きて便所にでも行こうかと思い扉を開けたら。そこには昨日、重傷人の怪我の治療をしていたベアトリスが椅子に座って本読んでいた。

「また招かれざる客が来たかしら」

「いきなりすまん。確か・・・ベアトリス、だったよな？」

「そうなのよ。まったくあの男といいお前といい、いきなり何なのかしら」

プリン怒っているベアトリスにオレは一つ疑問を感じた。

「なあ、あの男って誰だ？ ロズワール？」

「違いかしら。昨日の怪我人がさつき無作法にベティーの部屋に入ってきたのよ。お前みたいに」

「そうか・・・」

あの男は確かナツキ・スバルっていったか？

一応そいつにもブリタニアの事を聞いてみるか・・・もしかしたら何か知ってるかもしれないねえしな。

「さつきから何を黙り込んでるかしら。そろそろ出て行って欲しいのよ。嫌なら力づくで追い出すかしら」

ベアトリスはオレを部屋から出そうとして、身体中に魔力の様なものを纏わせ臨戦態勢をとった。

「につしし。そんなに警戒しなくても何もしねえよ。大人しく出てくからそう殺気立つなよ」

「どうかしら、お前からは強大なマナを感じる上にそうとうの手練のようだし・・・警戒するのが当然かしら」

マナ・・・オレ達で言う魔力みたいなもんか？

それよりもそんなに邪険にすることねえだろ。まるで化け物と

対峙するみてえに警戒してやがるな。

「わかったよ。 それじゃあオレはこの部屋を出る。 邪魔したな」

オレは大人しくベアトリスの部屋を出て行った。

確か便所はここにあった筈なんだけどな。 もう一度開くとそこにベアトリスは居らず、今度は便所に通じていた。

「不思議な事もあるもんだな」

(まったく朝っぱらから一体何なのかしら。 ベティーの読書を邪魔しないでほしいのよ)

ベアトリスはメリオダスが去ってから自身にマナを纏わせた事によつて所々本が落ちていたので、その片付けをしていた。

「それにしてもあの男、驚いたのよ・・・」

(ベティーは今さつき訪れた男に内心驚きを隠せていないかしら)

ベアトリスは驚いた理由、それはあの男が既に“呪われていた”からだ。 それもとてつもなく強力な呪いだ。

「あれ程の呪術、一体誰が・・・」

ベアトリスは片付け終わった部屋の真ん中でいつも通り椅子に座り本の続きを読んでいたが、しばらくはメリオダスに掛かった呪術が気がかりで集中出来ていなかった。

第5話

朝起きて庭でエミリアさんとラジオ体操をした後、朝食に呼ばれた。

「上から見てた感じ、あれなのよ。お前相当頭が残念な奴かしら」「いきなり何を言い出すんだロリ！」

「何かしらその単語。聞いたこと無いのに不快な感覚がするのよ」「ベティー久しぶり、ちゃんとお淑やかにしてたかな？」

この声はエミリアと一緒にいる精霊へパツクだ。

猫のような外見とは裏腹に結構容赦の無い攻撃を繰り返していた。

「にーちゃあー！」

するとベアトリスは笑顔でパツクに駆け寄った。

「にーちゃの帰りを心待ちにしていたのよ。今日は一緒にいてくれるのかしら？」

「うん大丈夫だよ。久しぶりに2人でゆっくりしようか。」

「うわーいなのよ♪」

俺はベアトリスの豹変っぷりに驚いた。

「おったまげたでしよ？ あの2人仲がいいから」

「おったまげたってきょうび聞かねえなあ・・・」

エミリアさんのおかしな言葉使いに苦笑いして座席の方に目を向けると、金髪の子供が椅子に座っていた。

「なあ、お前もこの屋敷の住人か？」

「いや、オレは昨日この主に招待されただけだ」

金髪の子どもは椅子から立ち上がり、俺の方に向かって来た。

「お前がナツキ・スバルだな？ 話しは昨日、エミリアから聞いた。オレはメリオダスだ」

「おお、俺がナツキ・スバルだ。よろしくな、チビ助」

「ああ、よろしくな。それと兄ちゃん、オレは多分お前よりも歳上だぞ」

「・・・え？」

この子は何を言っているんだ。 どう見ても中学生くらいにしか見えないぞ。

「朝から賑やかだーあね。 それにベアトリスも居るなんてめえーずらしい、私と食事をする気になったのかーあな？」

「頭幸せなのはその男だけで十分かしら」

今度は顔に化粧をしたピエロが出て来た。 メイドにロリにチビにピエロに精霊に天使、この屋敷には個性的な連中が多いな。

「食事の余興にいちいちピエロ雇ってるのか、金持ちの考えはよく分からんな！」

あまりにもおかしな格好に俺は笑いながらピエロの背中を叩いた。

「スバル・・・その人は・・・」

「いやいやいやあ、構いませんよエミリア様」

「どゆこと？」

エミリアが不穏な顔をしてこつちを見てくる。

「私がこの座敷の当主、ロズワール・L・メイザースと言うわあーけどよ。 ナツキ・スバル君？」

やっべえ、この屋敷のトップだったのかよ！ 知らなかったとは言えとんだ無礼をはたらいちまった！ 殺されたりしないよね？

そんな事もあって今は皆で食事をしていた。

ロズワールから聞いた話だがこの王国には王がおらず王選と呼ばれる選挙の様なものしていてエミリアがその王候補らしい。

そして昨日エミリアが徽章を盗まれてそれを取り返すのに活躍したということで褒美を貰える。

「褒美は思いのまま、さあ何でも望みを言いたまあーえ。」

「俺の望みはただ一つ、俺をこの屋敷で雇ってくれ！」

「へくちっ」

ちなみにメリオダスはブリタニアという地方を探す旅に出るらしい。そして五日後、俺は殺された・・・

第6話

スバル side

なんでだ・・・！なんで死んだ!?

俺は殺された理由がわからなくて部屋を飛び出しベアトリスの書庫に行った。その後、ベアトリスの変わりない態度を見て元気を出し、庭に出てエミリアとパツクと会話して、現在はロズワール達と朝食をしていた。

どこの誰かはわからんが俺とエミリアさんの交わしたデートの約束と笑顔の虜になった俺の執念深さを舐めんなよ！

「褒美は思いのまま、何でも望みを言いたまあーえ。」

「俺をこの屋敷で雇ってくれ！」

「ひっくっ」

「なるほど、スバル君はこの屋敷で働くうーんだね？それで、メリオダス君はどうするんだーあい？」

「そうだな・・・オレはブリタニアを探すために旅をするか・・・」

「待ってくれ！」

俺はメリオダスが旅に出るのを止めた。何故なら俺とメリオダスは突然この世界に来た、それも同じ日に。そして村人を含めこの世界に人達は俺達の地元を聞いたことが無いと言っている。とても偶然とは思えねえ。

スバル side out

メリオダス side

何故かスバルによって旅に出る事を止められ、この屋敷で傭兵とし

て雇ってもらった。

「驚いたなあ、まさかスバルもオレと似たような感じだったとはな。」
「ああ、正直俺もびっくりだぜ。俺以外にも異世界に召喚された奴が居るなんてな。俺は何の前触れもなくこの世界に来たんだが、メリオダスはこの世界に来る前に何かあったのか?」

「・・・オレはこの世界とやらに来る前に殺されたんだ。そしてオレのオヤジによって蘇らされたら、この世界にいた。」

「なっ・・・!?!お前死んで蘇ったのか!?!それも父親によって!」

スバルは驚いた顔をしている。まあ、普通そんな反応をするよな。死人が蘇るなんてありえねえからな。

「俺がいた世界より超ファンタジーでデンジャラスだなオイ!」

ふぁんたじー? でんじやらす? どうやらオレのいた世界とスバルのいた世界では少し言語の違いがあるらしい。日常会話では問題ねえからいいか。

「とりあえずお互い元の世界に戻れる様に頑張ろうぜ!」

「おう!」

オレとスバルは同じ目的を果たすために握手を交わした。

そしてこの屋敷に来てから五日目になった。その日はスバルとレムがアーラム村に買い物に行った。戻って来たスバルは何か思い詰めた顔をしていて、訳を聞いても適当にはぐらかされた。

そしてその日の夜はぐっすり寝たが、次の日が来ることはなかった・・・

メリオダス side out

ナツキ・スバル 屋敷に来て二回目の死亡

第7話

スバル side

屋敷に来て二回目の死亡、前回死んだ時は謎の体調不良と死ぬ瞬間、聞こえた鎖のような音……一体あれはなんの音だったんだ、あの鎖の音の正体が分かれば対策が立てられるんだが、とにかく今回は情報収集だな。

「俺を客としてこの屋敷で食っちゃ寝放題させてくれ！」

とりあえず情報収集と言っても何をするかだよな。メリオダスは前回と同じく傭兵として雇ってもらって話もした。

「相手を衰弱死させる魔法か……相手の魔力次第で出来そうだが、オレは出来ねえな。」

「そっか……ありがとな、メリオダス。」

メリオダスとの会話を終えて次の人を探したがレムは話す隙がないしラムも素っ気ない。となると……

「よっー！」

「またノックもせずに入って来て、無礼極まりない奴かしら。吹き飛ばされないうちにとっとと出て行くのよ。」

ベアトリスは掌にマナを集中させて俺を吹き飛ばす素振りを見せた。

「ちよちよちよ、たんま、待ってくれ。聞きたい事があるんだ。」

ベアトリスは黙って手を引き聞く体制をとった。

「相手を衰弱させて眠ったように殺す魔法とかあるのか？」

俺はベアトリスに謎の体調不良の正体を聞いた、あれは魔法ではなく呪いだつた。マナを吸われて衰弱死する呪いらしい。そしてこの屋敷には呪術師はいない上にマナドレインが出来るのはベアトリスとパックだけ。という事は犯人はこの屋敷に忍び込んだ鎖使いが俺に呪いを掛けた、それか呪術師と鎖使いは別の可能性もある。

夕方になり、ラムがお茶を持って来てくれた。俺はラムに『泣いた赤鬼』の話をして、ラムは辛辣な感想を述べた。そしてラムに『嫉

「妬の魔女』の話しを聞こうとしたがラムはそれを拒み、出て行ってしまった。

「怖い魔女、この名前を呼ぶ事すら恐ろしい、誰もが彼女をこう呼んだ、嫉妬の魔女と・・・」

三日後、俺は屋敷を出ることにした。玄関ではベアトリス以外の住人が見送ってくれた。ロズワールに口止め料事お土産を貰い、エミリアは完全に母親目線、メリオダスに激励を貰いメイド二人にも礼を言っって屋敷を出た。

「・・・この辺だな。」

俺は屋敷を出て行く振りをして屋敷が見える位置まで来た。これも犯人を見つけ出すためだ。そしてナイフを取り出して何時でも動けるように準備した。ナイフをこんな使い方をして怒られるだろうなど思い、空を見上げた。

「やっぱ死にたくねえな・・・死なせたくねえな・・・」

覚悟は決まった筈なのにそんな事を思っている自分がいる。

しばらく時間が経ちすっかり夕方になってしまった。レムが買い出しに行かなかつた事を疑問に思っていたら突然鉄球が飛んで来た。

「緊急脱出!!」

俺は崖から降りて逃げた、だが逃げた先はとても登れそうにない崖を前に立ち尽くした。そして俺はついに鎖使いの正体を見た。

「嘘だろ?・・・レム?」

その後、俺はレムに『魔女の瘴気』が出ている事を指摘され、魔女教と呼ばれる集団の仲間と勘違いされた。何が何だか分からなくなった俺は足をやられ、仰向けで倒れながらレムに今までの苦労を泣きながら吐き出し無様に喚き散らした。レムは聞いていられなかったのか俺の喉を潰し、止めを刺した。

ナツキ・スバル 屋敷に来て三回目の死亡

スバル side out

スバルがレムに殺される少し前

メリオダス side

オレはいつも通り屋敷の屋根の上で辺りを監視していた。辺りはすっかり薄暗いオレンジ色に染まっていた。

「スバルの奴、あんな所で何をしてんだ？」

オレはスバルがあんな所にいる事を疑問に思っているとレムがお茶を持って来てくれたようだ。

「メリオダス君、どうかしたんですか？」

「ああ、あそこの崖の上でスバルが何かするからちよつと気になつてな。」

「そうですか・・・」

レムはそのままハシゴを降りてどこかへ行つた。気がかりなのがレムの表情がいつもよりも暗く殺気立っていたように見えた。

数分後スバルが居た場所から大きな音が聞こえた。オレはすぐに向かったが・・・もう何もかもが遅く、レムがスバルを手に掛けている場面に出会ってしまった。

「レム・・・」

「これでいいんです・・・」

スバルとは三日間の付き合いだったが嫌いじゃなかった、だから少し残念だった。

メリオダス side out

第8話

メリオダス side

昨日、エミリアが連れて来たという怪我人は朝起きて突然何かに恐怖したように悲鳴を上げたらしい。なのでエミリアが

「メリオダス、お願い！スバルを助けてあげて！私には話してくれなかつたけど男の子同士なら話してくれるかもしれないわ！」

と言ってきたのでオレはそのスバルって奴の部屋まで来たのだが、先にベアトリスがスバルと話していた。

「よう、ナツキ・スバルだな？エミリアが心配してたぞ。」

「メ、メリオダス・・・すまねえ・・・」

ん？確かこいつとオレは初対面だよな？何でオレの名前を知ってるんだ？まあ、それはいいか。

「ベアトリスはここで何をやってたんだ？」

「ベティーはあの小娘に妙な言い掛かりを付けられてここに居るかしら。それでベティーはこいつを五日間守ってやる契約を結んだところだったのよ。」

「そうなんだ、それでメリオダスにも俺を守ってもらいたいんだ！頼む！」

いきなり頼まれたが、エミリアに助けてあげてと言われたしな。ブリタニア探しはその後でもいいか。少なくともエリザベスは大丈夫だしな。

「わかった、五日間お前を守ればいいんだな。任せろ！」

「すまねえ、恩に着るぜ。」

その後、こんな事になったのでロズワールにオレを傭兵としてこの屋敷で雇ってもらった。

そして四日目の朝になった。オレはスバルをベアトリスの禁書庫まで運び、ベアトリスはスバルを蹴って起こした。

「さっさと起きるかしら・・・ふん！」

「バンボルディア!!」

「約束に時間だから嫌々来てやったのに随分余裕のある奴なのよ。」

「肝心な四日目に居眠りとかマジ命知らずの阿保かよ！」

「それにしても遂に最後の日だな。」

「ああ、マジありがとな！二人とも！」

「礼を言うのはまだ早いかしら。」

ベアトリスはいつも通り椅子に座って本を読み出した。スバルもベアトリスに本を投げ渡されて読んでいる。オレはこの字が読めないから適当に座って明日まで待つ事にした。

それから数十時間経って突然ベアトリスが何かに呼ばれたらしく禁書庫を出た。オレはスバルを守るために禁書庫に残ったがスバルはベアトリスの事が気になったのか禁書庫の扉を開けた。その扉から朝日が差し込み遂に五日目が来たと自覚した。

「まさか・・・越えたのか？・・・四日目の夜を・・・ハ、ハハハハ・・・あれだけ遠いって思い込んでいたのに・・・こんなにあっさりと・・・」

スバルが喜びのあまり床に膝を着いた。だがそれも束の間、エミリアが血相を変えてやって来たと思ったら、いきなりスバルの手を引いてどこかへ行ってしまった。オレもすぐにその後を追っていると突然・・・

「いやあああああああ!!!」

ラムの悲鳴が聞こえたので急いで向かった。そしてその部屋にはベアトリス、ロズワール、エミリア、スバルそしてレムの亡骸の横で慟哭しているラムがいた。

メリオダス side out

第9話

メリオダス side

部屋ではレムの死に慟哭するラムとそれをただ見守る住民達、そして今だに何が起きたか理解出来ずにいるスバル……いや、理解したくないってのが正しいかもな。

「死因は衰弱死だーあね、眠るように命の火を消されている。魔法と
言うよりは呪術と言った方が正しい。」

ロズワールの言葉に反応するスバル、何かに気づいたようだ。

「お客人、メリオダス君、なーあにか心当たりはないかねえーえ。」

「悪いが知らねえな。」

「……俺は……!」

ビュン!

突然何も無い所から起きた風がスバルの横を通り、頬をかすめた。
ラムの風魔法だ。スバルの頬からは血が流れ驚いているにも関わらず
ラムはもう一撃魔法を放とうとした。

「何か知っているなら洗いざらい吐きなさい!!」

ラムが放った風の刃はベアトリスによって防がれる。

「約束を守る主義なのよ、屋敷にいる間はベティーとこいつが守る契
約かしら。」

「ベアトリス様……!!」

「ほう、この私が相手でも同じ事が言えるのかな?」

「ッ!!」

ロズワールは両手に四色の色の玉、おそらくあれは色事に魔法の属性
が違うのだろう。その魔法をベアトリスとスバルに向けて放った。

さてさてさーて、そろそろオレも動くとしますか。

「《カウンターバニッシュ》!!」

オレのカウンターバニッシュでロズワールの放った魔法を打ち消

した。

「メリオダス君、キミはこの屋敷の傭兵、そして私はこの屋敷の当主、すなわちキミは私の飼い犬のようなもの……その飼い主に逆らっていいと思っっているのかーあな？」

「につしし、なら番犬の首輪はしっかり握っておくもんだぜ！」

背中のロストヴェインに手を掛けオレとロズワールが睨み合ったまま動かない、どちらが先に仕掛けるかお互い牽制し合っているのだ。

「ツ……！」

「スバル!!」

スバルは部屋を飛び出しどこかへ逃げていった。そしてラムがスバルに向けて呪詛を言った。

「絶対に殺してやるうう!!!」

メリオダス side out

スバル side

俺は逃げてしまった。まだ弁明の余地はあった筈なのに俺はそれすら放棄して逃げた。もうあの場所には戻れない。

「はあはあ……死に場所……！」

そして俺はある崖の上についた。

「あとはここから目を瞑って一步踏み出せば……」

死ぬる……だが俺にそんな勇氣はなかった。そして今度死んだら戻れる保証はない、もしかしたら本当に死んじゃうかもしれない。

「くっ……！俺は、こんな簡単な事も……！」

自分の不甲斐なさに涙を流した。屋敷ではベアトリスとメリオダスがロズワール達と戦っている筈なのに俺はただ、その場にうずくまるしか出来なかった。

しばらくして夕方になってしまった。それだけの時間が過ぎたの

に俺は死ぬ覚悟が出来ない。するとベアトリスが突然やって来た。

「漸く見つけたのよ。」

「どうして……」

「何なのかしら？」

「どうして来てくれたんだ……俺は……」

「お前の身の安全を守るのがベティーの交わした契約なのよ。」

「メリオダスは……」

「あいつならまだロズワールと戦っているのよ。ベティーをお前の元に行かせるために囚になつたかしら。」

「そうか、メリオダスも俺なんかのために必死になって戦ってくれてるのか。」

「俺は、あの二人の事も守りたいと思っていた……！」

「お前はあの姉妹の何を知っているのかしら。どちらが欠けてももう元には戻れない、もう遅いのよ。」

「結局俺は、ただみつともなく騒ぎ立ててただけなのかよ……」

「せめて、目の届かない所で死んでくれないと目覚めが悪いかしら。だからお前を領地の外に逃がしてやるのよ。」

「そう言つてベアトリスは俺に手を差し伸べて立たせてくれた。」

「……」

妙な手の感覚……そういえばあの時、両手を誰が握ってくれて……
ラム……レム……

二人が苦しんでる俺を見てらんなくて両手を握ってくれていたんだとしたら……そんな奴らだったとしたら、俺は放っておけるのか？

「さつき屋敷から逃げた時、憎悪に満ちた声を聞いた。だがそれ以上に、あの泣き声が消えてくれない。」

「おい、馬鹿な事考えてるぞ、俺。せつかく拾った命なのにな……」

「そうだ、拾った俺の命だ！使い方は俺が決める！」

「……モタモタし過ぎたのよ。」

そこへ現れる、風魔法を全身に纏ったラム。正しく鬼の形相でこちらを見ている。

「やつと見つけた・・・もう絶対に逃がさない！」

「お前は下がるかしら、契約が生きている以上、お前の命は守るかしら。」

「ベアトリス様、お忘れでしょうか。ここは屋敷から遠く離れた場所、そして森の中、ラムからその男を守りきれぬ自信がおりますか？」

「・・・へ？」

「ビョーン・・・パツ！うん、中々快感！」

俺はベアトリスの頭にあるドリルのような髪の毛を伸ばして離れた。それに怒るベアトリス、俺はそんなベアトリスの前に行き、ラムの前に立った。

「いい度胸ね。やつと観念したってこと？」

「観念とは違うな、言うなれば覚悟が決まった！」

そして俺はラムに頭を下げて謝罪をした。やはりラムは俺が犯人と思っっているらしい、なのでそれを俺は否定してこう言った。

「・・・けど、わかんねえだらけの事を知っていかうと、そう思ったよ。」

「今更なにを・・・！ラムはもう死んでしまったの！今更何がわかった所で何が出来るの!!」

「何が出来るなんてかっこいい事は言えねえ・・・ただ俺は覚えてんだ・・・お前らが忘れたお前らを知っているんだ！」

「あなたに、ラムとラムの何がわかるの!!」

「そうだな、俺は肝心な事は何にも知らない。だけどお前らだって知らないだろうが！」

「何を・・・」

ラムの言葉の後に俺は深く息を吸ってこう言い放った。

「俺が！お前らを！大好きだって事をだよ!!」

そして俺は呆気に取られているラムをおき、後ろを振り返りそのまま走り出した。

「ッ！・・・待って！」

ベアトリスの静止の呼びかけも聞かず、そのまま走る。

そして・・・飛んだ

崖から落ちる最中に俺はその覚悟を声に出した。

「絶対に助けてやるうう!!!」

グシャ・・・

スバルside out

ナツキ・スバル 屋敷に来て四回目の死亡

第10話

メリオダス side

ナツキ・スバルという男がこの屋敷で働く事になり、オレも傭兵として雇ってもらった。スバルからは色々話を聞いてこの世界がオレ達にとって『異世界』だと言っているが、正直信じ難い・・・と言いたい所だが実際オレがそうなってる以上、その可能性はある。

スバルは初日から大忙し、それに引き換えオレは暇なもんだ。ただ屋敷の屋根の上で周りを監視しているだけで良いんだからな。

「おーい、メリオダスー!!」

屋敷の庭でスバルが手を振りながらこちらを呼んでいる。オレは屋根から降りてスバルとパツクの元に向かった。

「今俺はパツクに魔法属性を調べてもらってたんだけどよかったらお前も調べてもらったらどうだ？」

「属性？ちよつと面白そうだな。ちなみにスバルは何属性だったんだ？」

「俺の属性は『陰』で、主に目とかの五感を一時的に奪う事が出来るデバフ特化の魔法が使えるらしいぜ！」

なるほど、確かに熟練したらかなり厄介な魔法だな。

「じゃあ、メリオダスの属性を調べて見るね・・・みよんみよんみよんみよんみよんみよん・・・」

パツクはオレの額に尻尾を付けてみよんみよんと言いつ出した。

「んん？これは・・・なんだろう？メリオダスの属性は六属性の内どの属性にも該当していない。でも、あえて属性わけするとしたら『闇』だね。もう一つあったけどこれは『無』属性って感じかな？」

闇属性、ね・・・魔神族特有の魔力だな。それに無属性の方はおそらく全反撃やカウンターバニッシュとかの魔力だろう。

「闇属性とかかっけえな！羨ましいぜ、俺の陰属性と交換してくれよ！」

「につしし、魔神の血でも飲めば手に入るかもしれないぜ？」

「魔神の血で・・・それ絶対不味いだろ・・・」

オレの冗談にスバルは苦笑いする。その後オレは引き続き屋敷の屋根の上でずっと見張りをしていた。夕方になって空が薄オレンジ色になった頃どこからかスバルの泣き声が聞こえた。そういや何か思い詰めてる様だったからな。

オレは休憩がてら屋敷の中を適当にぶらぶらしていたらラムと遭遇した。

「あらメリオダス、ちょうど良かった。あれを何とかしてちょうだい。」

ラムは親指である部屋を指した。その部屋には膝枕をするエミリアとエミリアの膝で子どものように泣きじやくるスバルがいた。

「あの空間は流石に邪魔出来ねえな。」

「やっぱりね・・・」

嘆息するラムを余所に向こうからレムがやって来た。

レム「姉様、実はこの後スバル君と食事の用意をすることになってるので・・・」

「そうよね、まったくどうしたものか・・・そうだね、レム、ここはメリオダスと一緒に夕飯の支度をしてちょうだい。」

「さすが姉様、名案です。ではメリオダス君さっそく一緒に厨房へ行きましょう。」

「おいおい、本気でオレに料理させて後悔はないんだな？」
「何を言っているの？無駄口はいいから早く行きなさい。」

その後、オレはレムと厨房へ行き、料理をした。もともとオレは料理が下手で見た目は良いが味がダメらしい。その能力はこの世界に來ても健在だったらしくオレの料理を味見したレムは氣を失いかけたという。

メリオダス side out

第11話

メリオダス side

前回から翌朝

「という訳で心機一転、NEW俺で行くぜ！」

「膝枕ですネ。」

「膝枕だわ。」

「膝枕だな。」

「・・・ひよつとして見てた!？」

素つ頓狂な声を上げるスバルの元にエミリアが来て、気恥しそうにしている。スバルはエミリアに礼を言い、エミリアはその感謝を受け入れた。

そしてレムとラムとスバルで村に買い出しに行くらしい。オレも買い物に誘われたが傭兵である以上、流石に屋敷をガラ空きにする訳にも行かない。なのでオレはその誘いを断った。

オレは屋敷の屋根の上で監視を続けていた。一向に何も起きる気配は無い、暇で暇でしょうがない。するとロズワールが飛んで屋根の上まで来た。

「メリオダスクーーン、見張りはどうかーあな？」

「ああ、異常なしだ。しかし平和なもんだな、ここは。」

「まあここはメイザース辺境伯の領地、そう容易く悪巧みを考えようなんて思わないだろーおうから・・・ね、小さな魔神さん。」

「・・・お前・・・何でオレの正体が分かった？」

「私もついさつきわかったとこなんだーあよ。とある“本”を持っていてね、そこにはこう記されてあった『呪われし魔神と出会う』とね、まさかそれがメリオダス君だとは思わなかったけーえどね。おかげで見過ぐす所だった。」

「それで、その魔神を倒すべくここに来たのか？」

「いやいやまさか。私はその事を確認しに来ただけだーあよ。それ

じやあ、私はこれから外出に行く準備をしなければいけないから、失礼するよ。」

そう言ってロズワールは屋根を降りた。夕方になり空がオレンジ色に染まる頃スバル達が帰ってきて、その時ロズワールがスバル達に何かを言っただけかへ飛んで行った。

夕食を終えて夜になり、そろそろ寝るかと思っていた所に玄関先でスバルとラム、レム、エミリアが話しをしていて、スバルとレムがどこかへ行くこうとしていた。

「お前らこんな時間にどこへ行くんだ？」

「メリオダス！実はさっき行った村に呪術を使うか魔獣がいて、その魔獣に子ども達が呪いをかけたかもしれないんだ！」

「なるほど、もしかしたら村やその子ども達が危ないかもしれないんだな？」

「そうなんだ！そこで何だが、メリオダスも来てくれないか？もし魔獣と戦う事になったら正直俺は戦力外だし、レムがいくら強いと言っても俺や村人達を守りながら戦うのは流石に厳しいと思うんだ！だから頼む!!」

「・・・わかった、ただし・・・」

オレはへロストヴェインの特性《実像分身》でもう一人増やした。

「こいつはここに残って屋敷を守ってもらおう。」

「メ、メリオダスが増えた!？」

「どういう事!？」

驚く4人にロストヴェインや実像分身、ついでに全反撃についても教えた。

「つまり複数作って手数は増やせるけど一体一体は弱くなるんだな。」

「その通り、そしてオレの全反撃は、ほぼ0に近い力で撃つことが出来る。」

「なるほど、確かにメリオダスにとってはこれ以上うってつけの武器は無いわね。」

「そんな武器があったなんておったまげたわ・・・!」

「おったまげたってきょうび聞かねえな・・・」

「時間が無いので早く行きましょう。」

「おっと、そうだった！メリオダス、行くぞ！」

オレ達は屋敷を出てすぐにアールラム村に向かった。屋敷から出る前にエミリアが激励してくれていた、それに対してスバルも勢い良く右腕を挙げて返事をしていた。

メリオダス side

第12話

メリオダス side

オレ達がアーラム村に着くと、何やら村人達が騒いでいた。

「どうした!」

「あ、あなたは先程の! 実は村の子供が数名、家に帰っていないので探し回っていたのです!」

「くそっ! 遅かったか! . . . っ! あそこだ!!」

スバルは何かを思い出したようで、どこかへ走り出した。それについて行くオレと村人とレム。そして付いた先は村の端、近くに花畑があり、すぐそこに森と村を別ける柵があった。

「. . . そこ、結界が切れてる!」

「結界が切れてるとどうなる?」

「魔獣が境界線を越えて村に入ってきます。」

「魔獣?」

「魔獣は魔女が生み出した魔力を持った動物で人間の外敵で、森は魔獣の群生地帯です。」

「じゃあ、この奥には魔獣がうようよいんのかよ!」

「それだけじゃねえぞ、ほらそこに足跡がある。ってことはガキどもは森の中だ。」

「本当だ! 急いで村の皆に伝えてくれ!」

「はい!」

村人はこの事を伝えるに村の住宅街へ向かって走っていった。スバルは柵を越えようとした時、レムが止めた。どうやらこの騒動が屋敷を狙った陽動だと考えているようだ。

「レム、屋敷にはラムやベアトリス、そしてオレの分身もいるから大丈夫だ。エミリアだって弱いわけじゃねえんだろ?」

「それはそうですが. . .」

「それにもし、今屋敷に戻って守りを固めたら、ガキどもは死に、次の日には村人も全滅しているかもしれないぜ? 何だったらレムは屋敷

に戻っていてもいいぞ。スバルとガキどもは必ずオレが守るからよ
！」

「俺も守られる対象かよ!!」

「・・・わかりました、今回はメリオダス君の口車に乗ってあげま
す。・・・ただし、私もついて行きます。二人だけでは心もとないの
で。」

「それでいい、じゃあ森の中に入るぞ!」

オレ達は森の中に入り、子ども達を探索した。レムは鼻が利くらし
くしばらく森の中を探索しているとすぐに見つかった。しかし見つ
けた子ども達は衰弱が激しくスバル曰く、これは魔獣による呪術のよ
うだ。

「レム、この子達を村まで運んでくれ!」

「二人じゃ大変だろうから、こいつも連れてけ。」

オレは三人目の分身を作り、レムの手伝いをするように仕向けた。
「二人だけで大丈夫ですか?スバル君は戦力外なのでどうしようもな
いですけど、メリオダス君の今の実力は本来の三分の一程度しかない
んですよね?」

「問題ねえ、それよりもこの子ども達を頼んだぞ。」

レムはそう言われてオレの分身と渋々子ども達を村に運び出した。
後ろでレムに戦力外と言われて苦笑いしているスバルとさらに森の
奥へ向かった。

「っ!・・・メリオダス!あそこにもう一人いたぞ!」

スバルが見つけた少女は地面に倒れている。すぐに駆け寄り介抱
しようとした。

「よし、これで全員か?」

「ああ、あの子で全員助ける事が出来たが・・・まだ呪いが・・・」

「スバル、呪いの解呪方法はあんのか?」

「それは、ベアトリスに解いてもらうか、術を掛けた魔獣を殺せば呪い
は解呪される・・・っ!」

「どうやら、話してる暇は無さそうだな・・・」

いつの間にか数十体の魔獣へウルガラムがオレ達を取り囲んでい

た。

「スバル！その子のそばにいろ！こいつらはオレが相手をする！」

「メリオダス！お前一人で大丈夫かよ！」

「まあ見てなつて・・・はあ!!」

ドパアン！と言う音とともにオレに迫っていたウルガルの首を蹴り飛ばし、続いて二体のウルガルがスバルの方へ向かっていたので、一瞬で追いつき背後を取ってそのまま頭を掴んで後方へ飛ばした。

「つ、強ええええ!!」

「だろ?・・・それよりもスバル、呪いの解呪方法は確か術者を殺すことだったよな?」

「あ、ああ・・・メリオダス、まさか・・・!」

「こいつらを全滅させりや、呪いは解ける・・・簡単な解決方法だ・・・」

もしこいつらの中に術者がいなかったらベアトリスに頼めばなんとかなる。

「さてさてさーて・・・死にたい奴から前に出る・・・!」

ウルガルム達は天敵でも見るような目でオレを睨みつけ、一斉に飛び掛ってきた・・・だが、オレはその一斉攻撃を片手だけで応戦し、ウルガルム達は攻撃された部位を破壊され、悲鳴を挙げていた。

「次!」

メリオダス side out

第13話

スバル side

今はメリオダスが俺と俺が抱えている少女を守るためにウルガラムと戦っている。本来の力の内の三分の一程度と聞いて心配したがその必要はなかったようだ。

「おいしっかりしろ、もう大丈夫だ！」

「うう．．．う．．．」

少女は苦しそうな顔をしている。早く呪いと解かないと死んでしまう。

「スバル!!そっちに行つたぞ!!」

すると背後からウルガラムが一匹迫っていた。メリオダスも他の連中に気を取られていて反応が遅れたようだ。

「くっそ．．．！来るなら来やがれ!!」

俺は少女を後ろに隠し、ウルガラムの方を向いて構えた。だが、次の瞬間、ウルガラムは俺の目の前で真横に吹っ飛んでいった、そしてこの聞き覚えのある鎖の音。

「どうやら間に合つたようですね。」

レムが村に子ども達を運び終えて戻って来てくれたようだ。

「レム、スバルの後ろにいる子どもで最後だ！」

「わかりました！撤退しましょう！」

「わかつた！スバル、村に戻るぞ！」

「お、おう。」

メリオダスはウルガラム達を全滅させて村に向かうその道中、また新たにウルガラムが現れてはメリオダスが倒し、現れては倒すの繰り返しだった。そしてウルガラムの軍勢に狙われメリオダス一人では厳しくなっていた。

「これじゃアキリがねえな。」

「メリオダス君、私も手伝います！．．．うあああああ!!」

「っ！レム．．．その姿は．．．」

レムが叫んだと同時に額から角のようなものが生えてきた。

「はあ!!」

そして次々とウルガルム達を鉄球でミンチにしている、これにはさすがのメリオダスも驚いている様子だった。

「はあはあはあ．．．．．ははっ．．．はっははははははははははははははは!!．．．魔獣!魔獣魔獣魔獣魔獣魔獣．．．魔女!!」

レムは狂気に満ちた笑みを浮かべ、ウルガルム達を蹂躪していった。

「鬼だ．．．!」

「なんて奴だ．．．っ!危ねえ!!」

メリオダスはレムに土砂が迫っていたのでレムを押し飛ばして代わりにメリオダスが土砂を受け、数匹のウルガルム達に噛み付かれた。

「．．．はあ!!」

メリオダスは体を回転させてウルガルム達を吹っ飛ばしたが逃げられてしまった。

「くっ．．．どうやら、オレも呪いを受けちゃったらしいな。徐々に魔力を吸われてる感覚がある。」

「だ、大丈夫なのかよ!!」

「ああ、今のところ問題ねえ．．．っ!」

「メリオダス!!」

「メリオダス君!!死なないで．．．死なないで．．．!!」

メリオダスは突然倒れ気を失ってしまった。その後はメリオダスと子どもを村に連れて行き、ベアトリスが呪いの解呪に取り掛かった。

スバルside out

第14話

メリオダス side

(ここは……)

オレは眠りから起きたら、突然広くて何も無い草原にいた。

(ここはどこだ?)

辺りを見回してみると髪を風に靡かせた銀髪の女性の後ろ姿が見えた。

「まさか……」

エリザベス、そう思ったオレは銀髪の女性に近づき、声をかけようとしたその瞬間、視界が白く光り、銀髪の女性を包み込んだ。

「っ!!……」

気が付くとオレは既に草原には居らず、ベッド上にいた。オレが今見ていたのは夢だと理解した。

「漸く起きたかしら。」

「ベアトリス……ここは……」

しばらくの間眠っていたらしく、窓から見た空の色が薄いオレンジ色になっていた。

「ここはアラム村の宿舎かしら。昨日お前が魔獣に噛まれて倒れたのをベティーが治してあげたかしら。」

「そうか……」

「どうやら昨日はスバル達に迷惑をかけたらしい。後で礼を言わなくちやな。」

「だけど、呪いの解呪は出来ていないよの。」

「呪いが重なり過ぎたって事か?」

「ご明察なのよ。それにお前は既に呪われているかしら。その影響か、ウルガルムの呪術も解けにくくなっているのよ。早く手を打たないと、また術式が発動するかしら。」

「それなら、とつとつとそのウルガルムを倒しに行くか。あ、そういやスバルやレム、子ども達は怎么样了?」

「あの者達は全員無事かしら。呪術の方はベティーが全て解呪したのよ。お前も相当な数のウルガルムを倒した様だけど無意味だったのよ。」

酷い言われようだな。まあ、あれだけ倒して当たりが出なかったのは正直驚いたけどな。

「ああ、一応無意味ではなかったのよ。一人だけ、呪いが解呪されたのがいたかしら。」

どうやら一人だけ助けられたようだな、さてさてさーて、ウルガルムを倒して呪いを解呪しますか。

「ベアトリス、ありがとなー！」

礼を言ったオレに対して、ベアトリスは本に目を向けたまま片手でしっしつと払った。

部屋を出て村を歩いていたら村人が話し掛けてきた。

「おお、君も子ども達を助けてくれたんだね！ありがとう!!」

「まだ子どもなのに偉いねえ！」

「あなたが私を助けてくれた人だよね！」

村人達が声をかけてくれている中、突然後ろから子どもたちの声が聞こえたので振り返って見るとそこには赤いバンダナをした子どもがいた。

「オレが呪いを解呪したのはお前か。」

「そうだよ！ありがとうね！・・・えっとお・・・」

「メリオダス、それがオレの名前だ！」

「メリオダス・・・メリオダス！ありがとうメリオダス！私はペトラ！よろしくね！」

「ああ、よろしくな！」

オレがペトラや村人達と話していると、ラムがやって来た。

「メリオダス、お取り込み中悪いのだけど、話しがあるわ、ついて来なさい。」

オレはラムの後ろをついてきて、村の端の人道りが少ない場所に連れ込まれた。

「んで？急に何の様だ？」

「ええ、実は、レムとバルスがまた森に入ったの。目的はもちろん、メリオダスの呪いを解呪することよ。」

そうだったのか、だったら早く行ってやらねえとな。スバルはもちろん、レムだって一人では厳しい筈だ。

「そこでオレはあの二人、主にレムを助けて欲しいって事だな？」

「ええ、そうよ。最悪バルスは置いて来てもいいわ。」

いやよくねえだろ。

「とにかくわかった、今すぐに助けに行く。」

メリオダス side out

第15話

メリオダス side

ここは森の中、いつ何処からウルガルムが襲って来てもおかしくない魔獣の群生地帯。空はまだオレンジ色、だがもう少しすれば完全に暗闇になり、頼れるのは月明かりのみ。そんな中オレはレムとスバルを探し、そして自分にかけられた呪いを解く為にこの森まで来たのだが・・・

「何でお前までいるんだ?・・・ラム。」

オレの隣に立つ桃色の髪のメイド、ラム。彼女はオレの問に対して両腕を組み、鼻を鳴らした。

「あら、ラムが無しでどうやってレムを探すつもりだったの?ラムには波長が合う生物と視界を共有する事が出来るの。」

「確かにその眼があれば簡単に見つける事が出来るだろうな。・・・そういうえばレムが鬼って事はラムも鬼なのか?」

「ラムがレムと同じくらい戦えると期待しているのなら残念。ラムは鬼化出来ないわ・・・角無しだから・・・」

ラムは少し暗い顔をして自分に角が無い事を言った。ラムとレムの過去に何かあったのは確かだが今は気にしている場合では無い。

「もしかして、ラムが足でまといになると思っているの?だとしたら・・・」

オレはまったくそんな事を思っていないなかったのだが少しの間、黙り込んでいたらラムに誤解されてしまったようだ。

そしてラムは右側から迫っていたウルガルムをラムの風魔法で真つ二つに切り裂いた。

「・・・その考えは浅はかで愚かよ、メリオダス。」

「なるほど、自分の身は自分で守れるか・・・わかった!それじゃあ話もまとまった事だし、行くか!」

オレとラムは襲い掛かって来るウルガルムの軍勢を薙ぎ払い、ラムの千里眼でスバル達の居場所を探した。途中でラムのManaが尽きた

らしく、動けないラムを背負って捜索を続けた。

空の色が完全に黒くなり、月明かりに照らされている。レム達が遠くにいたので探すのに手こずったが見つげ出せた。少し広めの場所でスバルはボロボロになりながら折れた剣を持ちウルガラムと交戦していた。レムは鬼化しており、スバルに迫り来るウルガラムを次々とミンチにしていくな。

「レム……また……」

「ラム……?」

「ラムは……レムがあんなにボロボロになっていく姿を……もう見たくないわ……」

ラムはオレの背中で悲しげな目で小さく呟いた。その声には深い愛情があり、哀れみもあつた様に思えた。

「……レムを正気に戻す方法はあるのか?」

「……ある事にはある……レムの額にある角に強烈な一撃を与えれば……元に戻る……多分……きつと……」

曖昧だがこれしか方法がねえんならこれに掛けるしかねえな。オレは背負っていたラムを地面に下ろし、まずスバルの元に向かった。

「スバル!!」

「つ!!……メリオダス!お前、もう怪我はいいのかよ!」

「ああ、問題ねえ。それよりも、レムを正気に戻すからスバルはラムの所に行つてやってくれ。」

「わ、わかった!死ぬんじゃねえぞ!」

スバルは急いでラムがいる方向に向かつて行つた。そしてレムは周りにいたウルガラム達を全滅させてこちらを見た。

「ああああああ……!!」

オレは魔神化を使ってレムを戻そうと考えた。普段なら魔神化しなくても済むが、今のレムは鬼化の上に自分を制御出来ずに暴走しているらしい。なので、早期解決の為に魔神化したのだ、レムを背後にいる禿げた子犬の事を気になるしな。

「うああああああ!!」

レムのモーニングスターが右から高速で迫ってきたが、オレはそれ

をロストヴェインで弾き、接近した。

「はあっ!!」

オレはレムの角に向かって拳を叩き込んだが、レムは咄嗟に両腕で防ぎ、角へのダメージを防いだ。

「っ………!」

衝撃で遠くに吹っ飛ばされるレムに追撃しようと接近戦に持ち込み攻撃を続けた。身体へのダメージを最低限に抑えつつ角に強烈な一撃に中々難しい。

「そろそろお前とも最後にしたいもんだな……!!」

そんな声が聞こえて来たので見てみるとスバルと禿げた子犬が睨み合っていた。

そして子犬は唸り始め、巨大化していった。巨大なウルガルムとなった魔獣はスバルを見下ろし咆哮した。

「こつちには切り札があるんだ!覚悟しろよ!」

巨大なウルガルムはスバルを殺そうと牙を向けた。だが、それよりも早く、スバルは唯一の魔法を唱えた。

「シヤマアアアク!!!」

黒い霧がスバルから放たれ、ウルガルムと近くにいたオレやレムを巻き込んだ。ウルガルムとレムは何も見えていないようだがオレには何故かまったく効果が無かった。

「うおおおおお!!!」

スバルは視界を一時的に奪ったウルガルムの喉元に折れた剣を突き刺した。

「はあ!!」

オレもこれはチャンスだと思い、目が見えなくなったレムの角に口ストヴェインで峰打ちを叩き込んだ。

「ッ!!!」

レムは鬼化が解けたようで角が引っ込んでいき、気絶した。オレは倒れ込むレムを支え、魔神化を解除した。一方スバルの方はウルガルムに押さえつけられていたがスバルは喉元に突き立てた剣を抜き、ウルガルムの口を斬った。

「ッ………!!!」

ウルガラムは痛さのあまりスバルの上に置いた手を退けた。

「どうした………!こいやボスガラム!!!」

ウルガラムは再び咆哮しスバルに襲い掛かったが、その瞬間……

「ウル・ゴア!!」

突然降り注いだ炎がウルガラムに直撃し、全焼させていった。

「あははあー、少し見ない間に随分な有様になったねえーえ。」

「ロズつち……来るの超遅せえよ……」

スバルはロズワールに命を助けられて思わず座り込んでいる。

「スバル、大丈夫……じゃなさそうだな。」

「おうよーてかお前が来てくれなかったら俺死んでたわ、ありがとな

!」

「こつちこそ、オレの為にサンキューな!」

「それにしても君達は良くやってくれたよ。私が不在の間よく村を守り抜いてくれた、君達がしてくれた事へのお礼は尽くそうじゃないか。」

その後は気絶したレムとマナを使い果たしたラムを抱え、アールム村にいるエミリアと屋敷に戻り怪我の治療して眠りについた。

メリオダス side out

第16話

メリオダス side

魔獣退治より翌朝

スバルは昨日の事で疲れているらしく、まだ寝ている。そしてオレはいつも通り屋根の上で見張りをしていた。

「メリオダス君・・・」

「レムか、どうした？」

「あの・・・呪いの方は大丈夫何ですか？」

「ああ、お前らおかげで呪いの方は解呪出来たみたいだ。」

「そうですか・・・昨日は、ご迷惑をおかけしてすみませんでした！」

レムは昨日暴走して危害を加えようとした事を謝ってきてくれた。

「気にすんな！俺もスバルも無事だし、ラムだってかなり疲弊していたが命に別状はねえんだから。それにお前はオレのために魔獣退治をしてくれたんだろ？謝ることなんてねえよ。」

「ですが・・・それでは・・・」

罪悪感は無くならない、か・・・

「姉様ならもっと上手く立ち回れました。レムは非力で、鬼族の落ちこぼれで、だから姉様には届かない。レムは姉様の代替品、それもずっとずっと劣る出来損ない何です・・・どうして、レムの方に角が残ってしまったんですか・・・どうして・・・どうして・・・！」

「あっ・・・ごめんなさい！おかしな事を言ってしまった、忘れて下さい。」

涙を流したレムは服の袖で拭いた。拭き終わるのを見てオレは話をした。

「レム、ラムはお前よりも家事や料理が劣るってスバルが言ってたぜ、おまけに仕事はサボるし口は悪いしで・・・」

「ち・・・違うんです！本当の姉様は・・・角があればそんな評価には・・・

！」

「けど実際にラムに角はねえ、いや、あろうがなかろうがラムにはあつてラムに無いものがある、だろ？」

「………」

レムは驚いた表情でこちらを見ているがすぐに暗い顔に戻った。

「でも……やっぱり姉様ならもっと上手く……」

「かもしれないが、助けてくれたのはレムだ。正直、オレとラムだけだったらウルガルムを殲滅するのは厳しかった、さすがに森全体を焼くのは不味いからな。だから、助かった！」

大粒の涙を流しながらレムは話しを聞いてくれた。

「レム、ありがとなー！につししー！」

「はい……！」

レムは涙を流しながらも笑顔になってくれた。その後、しばらくはレムと一緒に話しをしていた。かなり話し込んでいたのですっかり昼時になってしまい、何故かオレがラムに叱られる事になった。スバルもラムにたたき起こされて悲鳴を上げながら働いていた。少しはスバルやオレを労わってやってくれと願うぜ……

メリオダス side out

第17話

メリオダス side

魔獣騒動から数日が過ぎてスバルの怪我は殆ど治ったらしいが、エミリアの話によるとスバルの中にあるゲートが治っていないらしい。オレは相変わらず屋根の上で見張りをしている。

「メリオダス君、お茶を入れて来ました。休憩にしましょう。」

「おう、すまんなレム。」

「いえいえ、それよりも知っていますか？先程から庭に停まっているあの竜車・・・カルステン家の関係者らしいですよ。」

レムの口から聞き慣れない名前が出てきたと思いつつ、レムの入れてくれた紅茶をすすった。

「そのカルステンってのは何者なんだ？」

「知らなかったんですか!?カルステン家と言ったら王候補の一人でルグニカ王国を長きに亘って支えてきた、カルステン公爵家の当主ですよ。」

「ほお、つまりエミリアのライバルってとこだな。でもそんな奴がここに何の用だろうな。」

カルステン家の使いが何故こんな場所に来たのか考えながら紅茶を飲み干した。するとスバルが竜車の近くにいた老人と話しているのを見たのでオレも行ってみる事にした。

「レム、紅茶サンキューな！美味かったぜ。」

「はいー。」

オレは屋根から飛び降りスバルの下に向かった。

「よおスバル。こんなところでサボりか？ラムに見つかったらただじゃすまねえぞ。」

「あ、メリオダス！ってかサボりはお前もだろうか！」

む・・・スバルにしては痛いところを突くな・・・

「お取り込み中失礼ですが、貴方は？」

「オレはただの傭兵だ。あんたは？」

「私はクルシユ・カルステン様の従者にございます。」

この爺さん中々強いな、幾つもの戦場を潜り抜けてきた顔だ。どっかの豚野郎とは大違いだ。

「ヴィル爺く！外で待たせちゃってごめんねく退屈だったでしょう？」

「いえいえ、こちらの方々が老骨の話し相手になってくださいましたので。」

今度は猫耳の女が現れたと思ったらスバルを興味深そうに観察しただした。

「なるほどくそつかそつかあ、君がエミリア様の言ってた男の子ね。」

「エミリアが？」

「にやんも聞かされてないだねえく。行こう、ヴィル爺。・・・王都で会おうね、そっちの子もじゃあねえく。」

そのまま2人は去って行ったがスバルはそれを見送らずエミリアの所に行ってしまった。

「嵐が去った後みてえだな・・・」

1人庭に取り残されてしまったオレはこれからどうするべきか・・・とりあえずスバルを追うことにした。

「俺はエミリアさんの助けになりてえんだ！頼む！」

スバルの声が廊下まで響いていたので何事かと思つたらスバルは王都に行きたいらしい。エミリアも近々王都に行く予定があるらしくそれについて行って助けになりたいようだ。

「いいんじゃないかい？王選つてーえのとは別として、スバル君が王都に行くのは治療目的もあーあるしね。」

「治療？」

「先程の使者は王都でもとびつきり優秀な治癒魔法の使い手だーあよ。クセのある子だからエミリア様が協力を取り付けるのも苦労されたもーおね。」

「エミリアたんが俺の為に!？」

「スバルの身体が治らないのは私のせいでもあるもん!だから、これは恩返しって言うか損失に対する正当な補填なの!」

顔を赤くしてエミリアは一生懸命言っている、素直じゃねえな。

「あとメリオダス君。君は君で王都に来てもらうからねーえ。」

オレも?なんでだ?」

「それはエミリア様の護衛だあーよ。流石に王候補の方を護衛無しに出歩かせるわけには行かないからね」

「おお!一緒に王都に行こうぜメリオダス!」

という訳でオレも王都に行く事になったが一体何をさせられるんだか、若干不安になったがまあ良しとしよう。

メリオダス side out

第18話

メリオダス side

今俺達がいるのはルグニカ王国、ロズワールの屋敷から竜車に乗り、王都まで来たのだが・・・

「あのエミリアたん、これやっぱりやめね？」

エミリア「絶対にだあーめ！スバルの事だから、目を離れた際におかしな事するに決まってる！」

スバルの言っているこれとはエミリアに手を繋がれていることだ。男として見てもらいたいスバルからすればこれは恥ずかしいだろうな。肝心なエミリアはスバルを友人として・・・と言うより今に限っては母親みたいになっている。

「いい加減イチャつくのはその辺にしとけや！客が寄り付かなくなんだろうが！」

後ろから男性の声が聞こえたので俺達は振り返って見たら、そこには顔に傷のある悪人面の男が居た。

「せっかく約束を果たそうって来たのに連れられないねえ。」

「無一文じゃなく、買い物に来たつてのはありがたいけどな・・・つと、そこの坊主もお前の連れか？」

「ああ、こいつは一緒に働いているメリオダス。俺達の護衛だ。」

「スバルはついでだけどな。」

「んなっ!!」

「ほおうちっこいのに偉いじゃねえか！俺はカドモンってんだ、よろしくな坊主！これうちで売ってるリングだ、一つサービスだ！」

顔は悪人面だが悪い奴ではなさそうなので安心した。やっぱり人は見た目じゃないってことか。

「それじゃあ、私達は別の用事があるから貴族街の手前にある詰所に行くんだけど、メリオダスはどうする？」

「んじゃ、オレは街を適当にぶらぶらしてるわ。」

「そうか？じゃあ後で待ち合わせしようぜ。」

「そうね、まあメリオダスなら一人でも大丈夫だと思っけど、一応気おつけてね。」

オレはスバル達と別れて街を探索した。どの建物もブリタニアには見かけないものが多く新鮮な気分だ。さっきは言わなかったがこの世界ではリンゴの事をリングと言っらしい。他の食べ物もおそらく微妙に違う読み方だろう。

「しっかし何をするかな〜」

特にやりたい事も無かったオレは適当に街を歩き、酒場を見つけ酒でも飲むかと入店したら店主に「子どもがこんな所に来るもんじゃない！」と叱られてしまい、追い出されてしまった。

そんな事をしているうちにすっかり夕方になってしまい、結局何もしないで一日が終わってしまった・・・かのように思えたその時

「メリ・・・オダス・・・？」

オレの後ろから聞き覚えのある女の声が聞こえ急いで振り返った。

「エリザベス・・・？」

そこにはかつて愛し合い、互いに呪いを受けた最愛の恋人の姿があった。

メリオダス side out

第19話

「メリオダス・・・ひゃあ!」

「ふむふむふーむ、相変わらずお元気そうで何よりですなあ」

「あつ・・・ちよ、ちよつとメリオダス・・・!」

再会早々エリザベスにセクハラをし出したメリオダスはいつの間にか自分の事を呼び捨てで呼ぶようになってきているのに気づき、違和感を覚えたが、そんな事は気にせず続けた。

「エリザベスちゃんに何してやがるんだ!この豚野郎!!」

「ホーク!お前もいたのか。」

「メ、メリオダス!?!お前死んだ筈じゃなかったのか!?!」

なんとエリザベスだけでなくホークもルグニカ王国に来ていたらしい。そしてメリオダスは何故二人が・・・いや、一人と一匹がこの世界に来てしまったのか聞き出した。

「実は、私達にもよく分からないの・・・」

「〈豚の帽子〉亭に居たら急にここに飛ばされてよお、んで俺は周りを探索して帰って来たたらお前がエリザベスちゃんにセクハラしてたって訳だ。」

「なるほどな・・・」

メリオダスは考えていた。彼の場合は命を落とす煉獄からブリタニアではなく、ルグニカに蘇生させられていた。これは魔神王が意図的にしたのか、それとも何らかの手違いがあったのか定かではない。だがエリザベスとホークは話しを聞く限り死んではないのに何故この世界に来たのか分からなかった。

「・・・ま、何にせよお前が無事ならそれでいい。それに、また会えて良かった・・・エリザベス。」

「私も、会えてすごく嬉しい・・・メリオダス・・・!!」

「ああ、約束だからな。オレはどんな場所からだって、必ず生きてお前の元に戻る・・・ってな!」

「うん!」

「まあ、戻って来たってよりはこっちが迎えに来たって感じだけど

な。」

その後はメリオダス達は今晚泊まる予定だった場所に行き、ロズワールにエリザベス達の話をして屋敷に雇ってもらおうと交渉しようとしていた。

「なるほどねーえ、エリザベスさんは君と同じブリタニアと言う地方からやって来たと・・・」

「そうなんです・・・あの、私をロズワール様の屋敷で雇ってもらえませんか！私・・・メリオダスと一緒に居たいんです!!」

「エリザベス・・・ロズワール、オレからも頼む！」

「・・・確かメリオダス君には魔獣退治の時の褒美を与えてなかったね・・・いいでしょう、エリザベスさんは今日から我が邸宅の使用人てーえ事でよろしく頼むよ。」

「ありがとうございます！ロズワール様!!」

「よかったな！エリザベスちゃん!!」

「・・・ん？」

人の言語を喋る豚、ホークを見てロズワールは少し驚いていたが理解出来たらしく笑いながら言った。

「おやおやメリオダス君、お土産に家畜を捕って来てくれたなんて気が利くじゃないか。」

「誰が家畜だ豚野郎!!俺は残飯処理騎士団団長ホーク様だ！」

「残飯処理騎士団・・・？」

「偉そうな豚ですまん。こいつで良ければ煮るなり焼くなり好きにしていいぜ。」

「そうそう・・・ってどっちも堪忍しろ!!」

という訳で無事にエリザベスはロズワール邸の使用人になることができ、その後ホークも雇ってもらえたらしい・・・残飯処理係として・・・

第20話

メリオダスはエリザベス、ホークと再会を果たした次の日、メリオダスはエミリアの仮騎士として王城に向かっていった。

「なあエミリア、やっぱスバルは置いて来たんだな？」

「ええ・・・」

王城に向かう竜車の中でエミリアはずっと不安そうな顔をしていた。メリオダスは「しまった」という表情でエミリアを見た。エリザベスとホークは一足先にロズワール邸に帰してラムに教育してもらう事になっている。

「そういやロズワール、オレは王選って奴でエミリアを護衛しているだけでいいのか？」

「ああ、君は仮騎士ってーえ名目だけど実際はエミリア様の護衛をしていればいいんだけどだーあよ。王選では何が起こるか分からないからね」

「なるほどな・・・」

そしてメリオダス達は王城に着き王選が行われる会場に来た。中はかなり広く既に六十名近くの人が集まっていた。巨大な扉からメリオダス達が入って来たことよって注目を浴びた。

「あれが銀髪のハーフェルか」

「よく半魔風情がこの場に来たものだな」

「汚らわしい・・・メイザース辺境伯は何を考えているのだ」

ヒソヒソと黒服に身を包んだ貴族達がメリオダス達・・・いや、エミリアを侮辱する言葉が聞こえてくる。それに対してエミリアは辛そうな顔をしていたのでメリオダスが反論しようとしたがエミリアは「大丈夫よ・・・」とメリオダスをなだめた。

「それじゃあメリオダス君はあつちに並んでねーえ」

そう言うのと騎士達の方を指さした。メリオダスはロズワールに言われた通り並ぼうとしたら前に屋敷に来たていた猫耳の亜人、フェリスに話しかけられた。

「あれあれ？君は確かメリオダス君、だったけ？君もここにきてた

にやんてねえ・・・てつきりスバルきゅんが来ると思ってたよ」

「スバルも来たがってたんだが、エミリアにどうしてもダメだと言われたから留守番させてるんだ」

メリオダスがそう言った瞬間、扉が開く音が聞こえた。そして閉じた扉の前に真っ赤なドレスを纏った女性と奇抜な服装の男性、そしている筈のないスバルの姿が見えた。

「ふうくん・・・ああ、これは荒れそうだね」

そう言うとフェリスは騎士達の列の方へ行ってしまった。エミリアとスバルが何か揉めている様だがもうすぐ王選が始まるのでメリオダスも並ぶ事にした。

「あ、メリオダス・・・よお・・・」

「スバル、何でここに？エミリアに止められてたんじゃなかったのか？」

「ああ・・・そうだったんだけど、やっぱり俺はエミリアの助けになりてえんだ！」

「スバル・・・ま、来ちまったもんはしようがねえよ。オレ達は何か起きるまで大人しくしてようぜ」

そしてスバルはラインハルトとの再会を果たし、フェリスが実は男だと言うことを聞き、スバルだけでなくメリオダスも驚愕していた。ラインハルトが連れて来たと言う五人目の王候補であるフェルトが入場したのだからいきなりラインハルトに蹴りを入れた。しかし、容易に受け止められてしまい怒り散らしていた。

「やっぱり人間って根っこの部分はそうそう変わんねえよなあ、俺だけじゃなく」

「お、何でこんな所にいんだよにーちゃん」

すると突然スバルを蹴り始めた。どうやら傷の具合を確かめたようだが手荒だったためスバルが怒った。

「ところでよお、何でこんな所にガキがいんだ？騎士には見えねえけど」

「ガキじゃねえ、メリオダスだ」

「メリオダス？聞いた事ねえ名前だな。てめえもにーちゃんの知り

「合いか？」

「ああ、スバルと同じエミリアの従者だ」

「へえ、あたしはフェルトだ。よろしくな、メリオダス！」

「申し遅れたけど僕はラインハルト・ヴァン・アストレア、よろしくね、メリオダス」

ラインハルトとフェルトとの自己紹介も終わりやつと王選が始まろうとしていた頃スバルは紫色の髪をしたユリウス・ユークリウスをずっと睨んでいた。

第21話

「しかし、龍歴石が認めたからと言え人選に問題があるのでは？」

フェルトが王候補である事をラインハルトが証明した瞬間、一人の貴族が不服を示した。

「我々騎士が、人選を見誤ったと？」

その貴族に対して近衛騎士団団長のマーコス・ギルダークが質問し他の騎士達も一斉に貴族の方に顔を向けた。

「何か不穏な空気になってきてるぜ・・・」

「ま、俺は別に気にしねえけどな」

「フェリちゃんも別ににやんともく。だって、フェリちゃんの忠誠はもうたった一人に捧げちゃってるわけだし」

「私も同じだよ。既にアナスタシア様に剣を捧げている」

皆それぞれの主に忠誠を誓っている事を示し、スバルも気持ちではここにいる者達に負けていないと思っている。

そうしている間に貴族の方でフェルトが王候補である事に対して不満を口に出し始めた。だがそれを賢人会の代表を務めるマイクロトフが鎮め、ラインハルトにフェルトを選んだ経緯を聞いた。

「フェルト様はおよそひと月前、貧民街の一角で保護しました」

「貧民街の浮浪児だど!？」

「・・・浮浪児で悪かったな!!勝手に連れて来たのはお前らだろうが!!」

再び貴族達が騒ぎ始め、フェルトも流石に我慢出来なかったらしく怒鳴り散らした。するとそこにプリシラがフェルトに呆れ、侮辱するような発言をしていた。エミリアもフェルトを庇い、プリシラに謝罪を求めたが聞き入れてもらえないだけでなく侮辱の対象となってしまう。

「では、王選候補の皆様、こちらへ」

王選候補者が一人一人呼ばれ演説する事になり、まずはプリシラ、その次にクルシュ、アナスタシアの順番で行われた。

「エミリア様とその推薦人のロズワール・L・メイザース辺境伯並び、仮騎士メリオダス」

「私の望みはただ一つ、公平である事。全ての民が公平である国を創る事です」

「そーおれにしても、こうして騎士達が介添人として続いた後だと、私達の場違い感が凄くて困りものだーあよね」

「オレも本物の騎士じゃないからな」

続いてラインハルトとフェルトが呼ばれたが当のフェルトは王選に参加する事を否定した。

「では、フェルト様は王候補を辞退すると?」

「たりめえだクソツ!」

「戯言だ!これまでは非常時故に見過ごしてきたが、この身勝手には話しにならない!!」

「全くだ、浮浪者を担ぎあげようとするアストレア家にも半魔を王に推挙するメイザース辺境伯の愚挙も!」

「ハーフェルフを半魔等と呼ぶのは悪しき風習ですよ」

フェルトの辞退によって堪忍袋の緒が切れた貴族がまだ騒ぎ出し、エミリアも半魔呼ばわりされたがロスワールが否定した。

「銀髪の半魔はかの『嫉妬の魔女』の容姿にそっくりではないか。玉座の間に入れることも恐れ多いとなぜ気づかぬ!汚らしい!」

「おいお前・・・」

「ふざけてんじゃねえええ!!!」

エミリアに対する悪態があまりにも酷かったのでメリオダスが言い返そうとした時、スバルが激昂した。

第22話

「ふぎけてんじやねええ!!!」

「!!」

スバルの言葉にエミリアとその場に居た者は驚き、ロズワールはニヤリと笑った。

「落ち着け、スバル!」

「スバルいいの、もうやめて!」

「いいや、やめねえ!!お前ら!!エミリアに謝れ!!!」

「スバル!!!」

「っ!・・・」

メリオダスとエミリアは一度スバルに静止を呼びかけたが、それでも止まらなかったのでエミリアはスバルの名前を大声で呼び今度はスバルも驚き、止まった。

「改めて栄誉ある賢人会の皆様申し上げます。私の名前はエミリア、火のmanaを司る、大精霊。パツクを従える、銀色の髪の子エルフ」

エミリアは賢人達に自己紹介をした途端、周りにいる貴族達がざわめきだしていた。それは銀色の髪の子エルフと言う事だけでなく、大精霊を従えている事に対して驚いている様だった。

「ハーフェルフである事や、魔女との共通点で偏見の目に晒されるのは分かっています。・・・でも、私にそれだけの理由で可能性の芽を全て摘み取られるのは断固として拒否します!」

「エミリア・・・」

「よく言った、エミリア」

「時にエミリア様、そちらの御仁はどういった立場になるのですかな?」

「あっ・・・えつと・・・この子は・・・」

マイフロトフにスバルとの関係を聞かれたエミリアはさつきまでの威厳とは裏腹に不意をつかれたような顔と声でパニツクになっていた。その時スバルは賢人達の方に歩いていった。

「大丈夫だよエミリア、俺も覚悟は決まったからさ」

「覚悟って何が？…ねえちよつと、スバル何する気なの!?待って!」
覚悟を決めたスバルにエミリアは不安になり止めようとしたが、スバルはそれを無視して賢人達の前に出て

「初めまして、賢人会の皆々様。俺の名前はナツキ・スバル!ロズワール邸の下男にして、こちらにおあす王候補、エミリア様の一の騎士!!」
自分がエミリアの騎士だと示した。

「ふむ、騎士ですか…ではそちらのご息子は一体…」

「オレは別にエミリア様の騎士じゃねえよ。ここには護衛で来ているだけだ」

「ちよつとメリオダス君、それは一応名目としてって言う話しなんだーあけど」

「あ、すまん。言っちゃった」

「まあ、いいけどね…」

「話しの途中で失礼します。ですが、どうしても彼に…いや、彼等に聞かなくてはならない事が。まずはナツキ・スバル、君がエミリア様の騎士を自称するのか?」

メリオダスとロズワールの会話が終わった時、ユリウスが一步前に出てスバルとメリオダスに聞きたいことがあると言い、まずはスバルに質問した。

「それはどういう意味で?」

「君はたった今、自分が騎士であると表面した。恐れ多くもルグニカ王国の近衛騎士団が勢揃いしているこの場で!」

ユリウスが喋り終わった瞬間、全騎士が剣を胸に掲げた事にスバルは少し戸惑った。

「…随分揃った動きだったな。今日の為に一生懸命練習したのかな?」

「そうだとも、王国の威信を知ら占める為に、我らは日々自覚と意識を高く持つ。…君に、それと並ぶ覚悟があるのかな?」

「っ…俺は、エミリア様を王にしたい…いや王にする!」

「そうするだけの覚悟が、そう出来るだけの力が自分にあると?」

「覚悟なんて大層な代物じゃねえし、力不足も承知の上だ！だけど、俺がエミリアを王様にする！」

「分からないな……これ程否定され、何故君はこの場に立とうとする？」

「……彼女が、特別だからだ！」

「っ……君がここに立つ理由については納得した。」

ユリウスはスバルの言い様に少し驚いて目を見開いたが直ぐに立て直した。

「だが、やはり私は君を騎士として認める訳には行かないな」

「何を！……」

「隣に立ちたいと思う相手にそんな顔をさせるのは騎士では無い。」

「っ！……」

ユリウスの言葉にスバルは我に返り、エミリアの方を見ようとしたが振り向けなかった。

「騎士がそんなに偉いかよ！生まれで選ばれたっただけじゃねえか！」

親の七光りでかっこつけ……」

「ナツキ・スバル、それは美しくない」

「くっ！……っ……」

「もういいでしょ？スバル……不要なお時間を取らせて申し訳ございません。直ぐに下がらせます。」

エミリアはそう言うときスバルの手を引っ張って扉を方に向かって行った。その際、マイフロトフに「良い従者を持ちましたな」と言われたがエミリアはそれを否定し退室させた。

「それでユークリウス、お主は確かその小童にも聞きたいことがあるのでは？」

マイフロトフの左側に座る賢人がユリウスに物申した。

「はい。それで君は荣誉ある賢人会の皆様に対しその態度はなんだ？いくら子どもと言えども限度がある」

「すまん、どうも畏まるのは得意じゃなくてな。それとオレはこんなナリだが子どもじゃねえぞ」

「……なるほど……では君は何故エミリア様に仕えている？」

「まあ、オレはロズワールのところで傭兵をやってるから自然にエミリア様にも仕えている・・・と言つていいのか・・・うくん・・・ま、困つてたら助けるっただけだ」

「傭兵・・・君は騎士では無いと言うわけか・・・」

「いや、一応前居た国では聖騎士をやつてたぜ？」

「ほう、では君に先程の彼とほぼ同じ質問をしよう。君には我々近衛騎士団と並ぶ覚悟はあるのかな？」

「覚悟、か・・・騎士としての覚悟とは違うかもしれねえが・・・オレは、愛する者との約束を守る為なら例え国を・・・世界を敵に回そうとも必ず果たす！」

先程までのおちやらけた話し方を辞め真剣に話し出したメリオダスにユリウスは驚き、同時にメリオダスを騎士として認めることにした。そして改めてユリウスが自己紹介をしようとしていた。

「・・・それが君の覚悟か・・・そう言えば君の名前を聞いていなかったね。私は《最優の騎士》ユリウス・ユークリウス、君は？」

「七つの大罪《憤怒の罪》ドラゴン・シンメリオダスだ！」

第23話

「七つの大罪?」

「そんな騎士団など聞いた事がないぞ?」

「憤怒の罪・・・まさか魔女教の関係者か!?!」

「!!?」

貴族達がまた騒ぎ出し、一人の貴族が魔女教の名を口にした瞬間その場にいたラインハルト、ユリウス、フェリス、マーコス以外の近衛騎士達がメリオダスを睨みながら腰の剣を抜こうとしていた。

「エミリア、何でこいつらはオレを睨んでるんだ?」

「そ、それはね・・・その・・・」

「魔女教と言うのは嫉妬の魔女を信仰している集団で、各国でも危険視するほど犯罪行為を繰り返している・・・その中でも“大罪司教”と呼ばれる幹部達は大量殺戮をする事も厭わない危険人物達ばかり・・・これだけ説明すれば魔女教がどういう連中か分かるよねーええ」

ロズワールの説明を聞いたメリオダスは口に手を当てて納得した。偶然にもメリオダスは《七つの大罪》団長の憤怒の罪、確かにこの世界の人間ならばそれだけで魔女教の関係者と疑われても可笑しくはない。

「一つ言っておくがオレは魔女教ってのには全くの無関係だぜ?この憤怒も偶然一緒なだけだ」

「そんなの信じられるか!!」

「ならば魔女教と無関係だと言う証拠を出せ!!」

「参ったなあ・・・」

貴族達は全く信用せずメリオダスを魔女教だと言い張る中、近衛騎士達は何時でも戦えるように臨戦態勢を取っている。エミリアはどうすれば良いか分からずオロオロしていて、他の候補者はただじっとメリオダスを見据えている。

「少なくとも私の目には、その男が嘘をついている様には見えんな」

すると王選候補者であるクルシュ・カルステンがメリオダスを擁護

した。

「そやねえ、仮に魔女教やとしたら近衛騎士団が勢揃いしてる場所であらうわがわが公言せえへんと思うよ？何より益があらへん」

「まあ、このちんちくりんが大量殺戮をする様には見えねーしな」

「なっ・・・何故だ!!此奴は即刻処刑すべきだと言うのが何故分からん!!」

「そうだ!!憤怒など、魔女教大罪司教のそれではないか!!」

クルシュに続いてアナスタシア、フェルトの擁護する様な発言に対して貴族達は不服を示した。

「皆の者、静粛に近衛騎士達も剣を収めなさい」

とうとうマイフロトフが静止を呼びかけ、騒いでいた貴族や臨戦態勢を取っていた近衛騎士達は静かになり、再びマイフロトフが話し出した。

「此奴が魔女教と繋がりにある件についてはクルシュ様やアナスタシア様の考察で判断した結果、現時点で信憑性が薄いものとする」

と言うことで話しはまとまったがメリオダスに対する疑心が晴れた訳では無い。特に貴族側はメリオダスとエミリアが魔女教と共にルグニカ王国を滅ぼそうなどと見当違いな事を考えた者もいたらしい。

その後はアニメ通り話しが進み王選が開始された。

第24話

王選が始まり、広間には王候補を五人とメリオダス、アル、そして少数の貴族が残っていた。

「さつきは弁解してくれてありがとな。フェルトに嬢ちゃん達、おかげで助かったぜ」

「なに、気にするな。卿は、嘘を言っていない、私がそう判断したままでだ」

「ほお、それが噂に聞く」風見の加護「やな」

「風見の加護？なんだそれ？」

メリオダスは3人に礼を言い、クルシュはあくまでも自分の意見に言っただけの様で腕を組みながら目を瞑った。そして嘘を言っていないと断言した事に対してアナスタシアが興味深そうに話した。そこで話しについていけないフェルトが風見の加護について聞き出した。

「ウチも詳しくは知らんけど、風を読む性質と、風のように目に見えないものを見る性質を併せ持つ加護らしいんよ」

「そしてその加護を通して他者の感情の風向きを見て、嘘をついているかいないかを判断する。何を考えているかまでは分からんがな」

「ふむふむふーむ、それでオレが魔女教じゃないと分かったのか。それにしても嘘を見抜ける加護か・・・魔法とは違うのか？」

右手の人差し指を立てながら説明するアナスタシアにクルシュが補足しメリオダスは右手を顎に当て納得した。メリオダスはクルシュの加護について考え、魔法との違いが分からなかった。

「加護はね、生まれた時に世界から与えられる祝福って言われていて持つてる人はすごく珍しいの。そして魔法は体の内や外のマナを使う事によつて繰り出すことが出来るの・・・」

「・・・なるほどな・・・つまり」恩寵「見てえなもんか・・・」

加護と魔法の違いについて聞いたらエミリアが笑顔でそう答えてくれたが、エミリアの笑顔は空元気によるものだど誰もが察していた。

「まあ難しい話しは分かんねえけど、こいつが魔女教じゃないならそれで良いんじゃないの?」

「そも此奴が魔女教であろうとなかろうと妾にとってはただの石ころに等しい。その様な事で一々囁るな凡愚共」

「ツ・テメエは・・・」

メリオダスの魔女教である疑いが晴れ、丸く収まろうとした時今まで黙って聞いているだけだったプリシラが口を開いた。その様子を見たフェルトはプリシラを射殺する様な視線で睨みつけた。

「その目は何じゃ? 雌犬。頭が高い、妾を誰と心得える・・・」

「姫さん、そいつぁ・・・」

プリシラがフェルトに向けて手に持っていた扇子を優雅に閉じて従者であるアルも止めようとしたがプリシラは聞かずフェルトに振り降ろそうとした瞬間、何者かに手首を掴まれその攻撃は不発に終わった。

「凡俗風情が妾に気安く触れるでない」

「悪いがそいつはオレの知り合いだ、黙って見殺しにするつもりわねえ・・・それにお前にとつてもフェルトを殺すのは得策じゃないだろう?」

「・・・得策では無い? 何を言う、この世は妾の都合のいいように出来ておる。故に妾に不利益が起ることは無い」

プリシラの攻撃を止めたのはメリオダス、だがそれに怯むことなくプリシラは気安く触るなど言いメリオダスは手を放した。そしてこの世は妾の都合のいいように出来ておるも豪語する様を見て他の候補者は少々驚いていた。

「まあ、そろそろこの余興にも飽きてきた所じゃ。ここは恐れ多くも妾を止めた貴様に免じて今回は引き下がってやろう。妾の寛大さにひれ伏すがよい」

「その傲慢さだけはどっかの髭面といい勝負だな・・・」

「報告致します! 騎士 ユリウスとナツキ・スバル殿が木剣による模擬戦を行っております!」

プリシラの発言に呆れてかつての仲間と比べている時、一人の衛兵

がユリウスとスバルが模擬戦をしている事を報告しに来た。どうやら模擬戦を持ち掛けたのはユリウスでスバルが受けたようだ。その事を聞いて、エミリア以外はやらせておけばいいと言ったがエミリアは直ぐに向かいメリオダスも少し遅れてスバルの所に向かった。しかし状況は酷くスバルが一方的に打ちのめされていた。

「スバル!!!」

「シヤマアアアアアク!!!」

スバルはエミリアの静止も聞かず陰魔法を詠唱した。動揺するユリウスを想像してチャンスと見るやいなやスバルはユリウスを倒そうと走る。

・・・だが・・・

「練度が低過ぎる。低級の魔法など、知能の無い獣でもない限り通用しない！」

スバルの切り札が呆気なくユリウスに破られてしまい、攻撃されてしまった。その間スバルは確かに聞いた。

「君は無力で、救い難い。あの方の傍に在るべきではない・・・」

胸を刺し心を抉る様な言葉を最後にスバルの意識は遠のき、そのまま気絶してしまった。

第25話

王選が開始されてから三日後メリオダスはスバル、レムと共にカルステン公爵家に泊まっていた。本来ならばメリオダスはエミリアの護衛をしなければならぬのだが、エミリア直々にスバルの事を頼まれてしまったのでカルステン家に滞在していた。

「はあ．．．はあ．．．」

「そろそろ終わりにしますかな？」

スバルはヴィルヘルムに稽古を付けてもらっていたが傍から見れば唯の八つ当たりか頑張っている事を主張している風には見えなかった。

「いいんですか？ヴィル爺だつてあの件で忙しいのに」

「客人の依頼だ無下には出来まい」

「稽古にやら良いんですけどね、正直、フェリちゃんには言い訳している様にしか見えません」

「太刀筋に迷いが見える、初心者つて理由だけじゃなさそうだな」

「ほう、卿も元は騎士だけあつて見る目はあるようだな」

窓からスバル達の稽古を見ていたメリオダスとフェリス、そして椅子に座つて書類を書いているクルシユはスバルについて話していた。特にフェリスは辛辣だった。

「ん？あれは．．．ラインハルト？」

「珍しいねえ、ラインハルトがここに来るなんて。一体何の．．．ああスバルきゆんに用があつたのね．．．」

「ふーん．．．それにしてもラインハルトつて恐ろしく強いよな？」

「それはそうだろう。何せ奴はこのルグニカ王国の最高戦力なのだからな」

「ありや、オレでも勝てるかどうか．．．」

「にやはは！君もかなり強い様だけどラインハルトには敵わないと思うよ？だからバカな事考えるのはやめにや」

メリオダスがラインハルトを見て自分をも越える強者なのではないかと思ひながら、クルシユの説明を聞いて内心では戦いたくてウズ

ウズしていた。しかしフェリスにはバレていたらしく止められた。ラインハルトが帰った後もスバルはヴィルヘルムと稽古を再開し、傷だらけになりながら庭で寝ていた。

「稽古、お疲れ様です」

「レム・・・それにメリオダス・・・」

「よっ、随分と元気が無いじゃないの」

「そりやな・・・お前らは俺の事、情けねえと思わねえのかよ・・・」

「思いますよ」「思うよ?」

「思うのかよ・・・」

スバルの質問に対してレムとメリオダスはキョトンとした顔で頷き、スバルは力の無いツツコミをした。

「じゃあ何で一緒に居てくれるんだよ・・・そう頼まれたからか?」

「いえ、私がそうしたいと思ったからですよ。私は以前二人に助けられ大切な事を沢山学びました。なので今度は私がスバル君とメリオダス君を支えたいんです」

「オレは頼まれたただけだが、お前とはそこそこの付き合いだ。一緒にいてやるよ」

「お前ら・・・ありがとな」

レムは以前の借りを返す為に、メリオダスはいつものとぼけ顔で軽口を叩くがスバルは少し間を置きお礼を言った。

「二人共、明日街に出かけませんか? 思えばここに来てから三日間何処にも言っていないでしょう?」

「良いんじゃないかねえか、たまには息抜きも必要だろ?」

「ああ・・・」

翌日には三人で街に出向きカドモンの店をレムとメリオダスで手伝い、スバルはカドモンと王選候補者の事で何やら揉めていた。メリオダス直ぐにエミリアに関する事だと確信した。店の番をしていた二人は嫉妬の魔女がどうのこうの言う者が多く、気になったメリオダスはレムに魔女について前よりも詳しく説明してもらい、嫉妬の魔女がどれ程危険かを知った。

それからメリオダス達はカルステン家に戻りスバルは風呂から上

がった後クルシュと酒を飲んでる所でメリオダスが来た。

「あらあらお二人さん、こんな良い景色を背景に晩酌ですか?」

「メ、メリオダス!」

「卿か、良ければ一緒に飲むか?・・・と、卿はまだ子どもだったな」

「オレはガキじゃねえから大丈夫だ。それにいつも飲んでたしな」

「そうなのか?ならば問題あるまい」

「いいのかよ!」

メリオダスの乱入により気まずい雰囲気が一気に和み、メリオダスが酒を飲む事に何の疑いも持たないクルシュにスバルはツツコミを入れた。

「んで、何の話しをしてたんだ?」

「ああ、治療の話しや王選についての話しだ」

「ああああ!!!何でスバルきゅんとメリオダス君がここにいる訳!!!」

突然フェリスが大声で叫んだので三人は少し驚きフェリスの方に顔を向けた。

「それにクルシュ様!!そんな無防備な格好でえ!!!」

「おかしいか?普段フェリスと晩酌する時と変わらないだろう?」

「そーれーがー!!問題何です!!男は狼にやんです!!!」

「お前も男だろうが」

「戯れは寄せフェリス、ナツキ・スバルの想い人が誰なのか王選の場に居た全員に知れている。それにメリオダスにも想い人が居るようだからな」

「まあ、スバルきゅんは喧嘩しちやったみたいですけどねー」

「・・・」

スバルはウィンクしながら発せられたフェリスの言葉で痛い所を突かれてしまい、顔を下に向けようとした時クルシュはスバルに喝を入れた。

「瞳が雲れば魂が陰る、それは未来を閉ざし、生きる意味を失うという事だ。下を向いている者にどれ程の事が出来る。顔を上げ、前を向き、手を伸ばせ。私は卿の事をつまらぬ敵と思いたくないのでな」

「とにかくスバルきゅんは早くエミリア様と仲直りしてくれなきや、

その為に何が出来るのか、それを費やして尽くすの」

「俺に何が出来るのか・・・」

二人のアドバースにスバルは少し考え、過去を思い出しながら気づいた。自分しか出来ないことに・・・

「出来る事なら、ある・・・俺にしか出来ないことある！言われるまでもねえさ・・・」

「・・・風が出てきたな、明日はまた、荒れた天気になりそうだ・・・」

自分にしか出来ないことがあると笑みを浮かべながら言うスバルをよそにクルシユは見透かした様に話した。

第26話

翌日、スバルはヴィルヘルムに剣の稽古を付けてもらった後、レムが真剣な顔でスバルを呼びクルシュの下に向かった。そしてメリオダスはというと、中庭でスバルの稽古を終えたヴィルヘルムに出会った。

「おや、メリオダス殿。何か御用ですか？」

「たいした用じゃねえんだけどさ、近頃戦でも始めるのか？」

メリオダスの質問に対してヴィルヘルムは少し眉毛を上げ驚いた様に見えた。

「・・・何故、そう思ったのですか？」

「まずオレ達がこの屋敷に来てから四日間、王選が始まるとはいえ人と物の出入りが多過ぎる事。これは昨日の夜、クルシュが言ってたから間違いねえ」

「・・・」

「そして何より、あんたからはオレと似た底知れねえ野心：いや、復讐心に近いものを感じた・・・と思ったんだが？」

メリオダスの言葉にヴィルヘルムは苦い表情で黙って耳を傾けていた。そしてメリオダスがヴィルヘルムから感じた感情、それは愛する者を奪われた感情だった。

「・・・見事、と言うべきですか・・・メリオダス殿・・・」白鯨”をご存知ですか？」

「白鯨・・・？」

ヴィルヘルムの口から出てきた言葉はメリオダスを賞賛するものと白鯨という単語だった。聞き覚えのない言葉にメリオダスは困惑するのを見てヴィルヘルムは白鯨の説明をしようとした。

「かつて魔女が生み出した三大魔獣の一角、四百年の間この地を踏み荒らし膨大な数の犠牲を出て来た”霧”の魔獣です・・・」

ヴィルヘルムの説明しながら発せられた声には怒りや憎しみがこもっており、メリオダスもその説明に納得した。

「そして十五年前の大征伐、白鯨を倒さんと選りすぐりの騎士達が集

いました」

「そこにあんたの愛した人が参加していた・・・」

「はい・・・私の妻、テレシア・ヴァン・アストレアが大征伐に参加し、命を・・・その時私は大征伐に参加出来ずにいました。ですから、私はこの手で白鯨を倒し仇を討ちたいと思っっているのです・・・！」

そう言ったヴィルヘルムの眼は燃え盛る炎の如く光っていた。

「・・・オレも、似たようなもんさ・・・」

「もしやメリオダス殿も・・・」

「ああ、オレはすぐ側に居ながら一度も救ってやれなかった・・・あの時も・・・」

メリオダスの脳裏には十六年前、今は亡きダナフォールで起きた悲劇・・・最愛の恋人であるエリザベス^スがフラウドリンに目の前で殺される景色が浮かんでいた。

「だから・・・今度こそオレは約束を果す・・・！」

「メリオダス殿、おそらく貴方は私が想像しているより遥かに壮絶な過去を抱えておいででしょう・・・その様子だと何度も経験されていきましょう」

「全く、勘のいい爺さんだぜ・・・」

「しかし不思議です。私には貴方が複数の女性を愛している様には見えません」

「・・・なあ爺さん、あんたは転生って知ってるか？」

ヴィルヘルムはメリオダスが複数の女性を愛していると勘違いしたらしく、メリオダスはエリザベスの呪いについて少しだけ話そうとしました。

「転生・・・ですか？それは・・・メリオダス!!」・・・スバル殿？」

「スバル？どうしたんだ？」

「今すぐロズワールの屋敷に戻るぞ!!」

急に話しを割って入って来たスバルに対してヴィルヘルムとメリオダスは疑問を抱くが、そんな二人をよそにスバルはロズワール邸に帰ると言ってきた。

第27話

「寝付けねえ……」

スバル達がカルステン家を出た後、竜車でメイザーズ領まで向かっていたがその夜、途中で地竜の限界が来てしまい宿に泊まることになった。

「起きてますか？」

「レムか？起きてるぜ」

中々寝付けずにいたスバルだったがレムが部屋のドアをノックしてきたので明かりをつけてレムを出迎えた。

「寝付けないので、少し話したくて……」

「レムもか、実は俺も寝付けなくてな……」

ベットに座り直すスバルの隣にレムが座り話しを続けた。

「……共感覚で知らされた分、レムもめっちゃくちや屋敷が心配だよな」
「……」

「大丈夫だつて、そう簡単に殺られる程、ヤワな連中じゃねえ。すぐに戻って俺が何とかするさ。メリオダスも居る事だしな」

「……はい、レムはスバル君とメリオダス君を信じています」

不安な顔をしているレムを元氣付けるスバルに対して笑顔になり信じていると言ったが、それでも内心では不安を隠しきれていなかった。

そしてレムはスバルの背中に身を寄せた。状況が理解出来ず顔を赤くするスバルは慌てていた。

「あれ……この感じて……」

「フェリックス様と同じ、ゲートの治療ですよ。スバル君」

「お、おとお治療ね、そうですね……やっぱり、最初は怒られちまうかな」

何かを勘違いしていたスバルは咄嗟にエミリアの顔が脳裏に過り怒られてしまうのかと心配していた。

「時間をかけて、ちゃんと向き合って自分の気持ち言葉を言葉にすればきっと分かってくれます。スバル君は素敵なお人ですから」

「そう、かな・・・そう、だよな・・・俺がいなきや・・・エミリアはダメだって・・・」

「ですから、その本の片隅に、レムの事も・・・」

途中から意識が朦朧としてきてそのままスバルは眠りに着いてしまい、レムはスバルをベットに寝かせた。

「スバルは寝た様だな」

「ずっと聞いていたんですか？悪趣味ですよ」

スバルが寝たタイミングでメリオダスが部屋のドアを開けて入室して来た。そんなメリオダスにレムは冗談混じりに罵倒した。

「いやあ、良い雰囲気だったもので邪魔しちゃ悪いと思ってつい・・・な」

「もう、メリオダス君ったら・・・」

「ま、冗談はさて置き、明日は朝早いからもう寝た方がいいぜ」

「そうですね・・・でも、スバル君は私達を許してくれないでしょう・・・」

「大丈夫さ、あいつなら分かってくれる筈だ。何故ならあいつは良い奴だからな！」

「はい！」

こうしてメリオダスとレムはそれぞれ部屋に戻り、眠りに着こうとしていた。メリオダスはエリザベスの安否を気に掛けていたが、敵の目的はあくまでもエミリアだと思っていた。だがこの後、屋敷に戻ったメリオダスは敵の目的はエミリアの抹殺だけでない事を知る。

翌朝、メリオダスとレムはスバルに書き置きを残して宿を出る。二人は竜車の乗りそのままメイザース領に向かった。道中は特に異常は無く難なくメイザース領のアーラム村の近くまで来ていた。

「メリオダス君！ここからは歩いて行きましょう・・・」

「ああそうだな・・・とにかく村に行ってみるか」

二人は直ぐ異変に気づいた。いくら何でも静か過ぎる、鳥の鳴き声どころか風の音も聞こえない。

「!!・・・これは・・・」

「こりやひでえな、虐殺されてるじゃねえか」

アーラム村に着いた二人は村の住民達が虐殺されている事に驚い

ていた。村の広場には大量の焼死体の山、周りには逃げ回っていた村人達の死体で散らかっていた。普通の人間がこの光景を見たら間違いないくトラウマになるだろう。

「こ、こんな真似が出来るのは・・・」

ドドオオーン!!!

「っ!!この爆発は、屋敷の方からです!!」

「っ・・・エリザベス!!!」

メリオダスは屋敷の方からの爆発を見てエリザベスの事を思い出し、レムを置いて全速力で屋敷に向かった。

屋敷の前までに来たがメリオダスの速度は落ちること無く屋敷に着いた。そんなメリオダスの前に数十人の黒いローブを着た死神の様な人達が突然メリオダスに向かって魔法攻撃を仕掛けた。

「・・・」

迫り来る無数の炎の球にメリオダスはロストヴェインを構え

フルカウスター
「《全反撃》!!!」

跳ね返した炎の球は倍以上に膨れ上がり黒いローブを着た人達に直撃した。そのままメリオダスは屋敷の中に入り無造作に走り回った。

「くそっ!どこだ!!エリザベス!!」

「おやおや、これはこれは、まだ生き残りが居たようですねえ」

躍起になってエリザベスを探すメリオダスの背後から男の声がしたので振り向いて見るとそこには先程の敵と似た黒いローブに目を大きく見開き深緑色のおかつば頭の男性が立っていた。

「・・・」

「おおつと失礼、私は魔女教大罪司教怠惰担当、ペテルギウス・ロマネコンティ・・・デス!!」

魔女教大罪司教と名乗った男は腰を異常は程深々と下げて自己紹介した。

第28話

「魔女教・・・皆が行ってんのはこいつらの事か。確かにイカれた連中だな」

メリオダスはロズワール邸の廊下で魔女教大罪司教のペテルギウスと対峙していた。

「それは心外ですねえ。私はただ！魔女への愛を示す為に！福音通りに従っているだけデス!!」

ペテルギウスは両手を大きく広げ、腰と首を曲げて叫ぶ。その様子を見てメリオダスはいつでも戦えるように身構える。

「そう言えばアナタ・・・先程誰かを探しているように見えましたか・・・もしや銀髪の少女をお探しデスカ？」

「っ！・・・何か知っているのか？」

ペテルギウスの言葉にメリオダスは反応し、怒りを宿したような眼でペテルギウスを睨みつける。そしてその眼を見たペテルギウスは邪悪な笑みを浮かべ口を開く。

「ええ・・・銀髪の少女は二人いましてねえ、両方共に深手を負わせましたが逃げられてしまったのデス・・・ああ、なんと言う怠惰！標的を目の前にして不確定要素を残してしまうとは!!・・・怠惰！怠惰怠惰怠惰怠惰怠惰!!」

自分を怠惰と蔑みながら指を噛みちぎるペテルギウスは指から血が流れるのも気にせず噛み続けていた。

「そうか・・・ならさっさとめえを倒して探さねえとな・・・」

ペテルギウスが腰を翻して自虐している間にメリオダスはそう呟き、ペテルギウスに向かって《^{ヘルレイズ}獄炎》を放った。

放たれた獄炎は真っ直ぐ飛んで行くがペテルギウスは避ける素振りも見せず、ただ黙って笑みを浮かべて立っていた。そして獄炎はペテルギウスに直撃しその衝撃は窓のガラスを割る程度だった。爆煙が上がり、メリオダスはじっと前を見つめていた。

「実に・・・実に実に素晴らしいデス!!その齡にしてなんと気高い意思を持った少年なのでしょう!!まさに魔女の“導き手”に相応しい

!!試練の前に彼のような者に巡り会えた事に感謝するのデス!!」

「・・・導き手?」

ペテルギウスが無傷でいる事、そして煙の中に透明な筋の様なものが見えた事にメリオダスは少々疑問に思ったがそれ以上に聞き慣れない単語に意識が行った。

「そうデス!アナタこそが私の福音書に記させている導き手!!そして何よりアナタは魔の者の寵愛を受けている!!アナタの存在があれば半魔を降ろす事も可能なデス!!・・・どうデス?・・・我々に協力しませんか?」

「断る!」

即答したメリオダスはペテルギウスに向けて獄炎を三つ放った。

が、またしてもペテルギウスはただ笑って立っているだけで避けずに直撃した。

「無駄なのデス。その様な攻撃をいつまでも続けるなど怠惰!!」

「・・・」

無駄なのはメリオダスも承知の上だ。だが最初の攻撃で透明な筋の様なものが見えたのを思い出し、もう一度煙で筋を目視出来るようにしたのだ。それによって筋を避けてペテルギウスに接近し直接口ストヴェインで斬りかかった。

「・・・っ!!」

「・・・なるほど、今の攻撃はあくまで囮・・・本命はアナタ自身でしたか・・・それに気づけなかった私は、なんと怠惰な事か!!・・・そして・・・」

ペテルギウスが分析している間にメリオダスの刃は届く筈だったのだが、何故かメリオダスは動きを止めた・・・否、止めたのではない、止まったのだ。

「怠惰なる権能・・・見えざる手、デス」

見えざる手と呼ばれる能力でメリオダスは今、無数の手に捕まって身動きが取れない状態だった。

「っ・・・くっ・・・!!!!」

次の瞬間メリオダスの身体は無数の手によって引き裂かれ周囲の

床や壁に赤黒い血が飛散していた。

「アナタは私に出会った瞬間殺すべきだったのデス。それが出来る実
力がありながら役目を怠った!・・・アナタ・・・怠惰デスねえ」

そう言ってペテルギウスはかつてメリオダスだったものに哀れみ
の目を向けたその瞬間、ペテルギウスの背後の窓から一つの影が入っ
て来た。

「お前がな」

その影の正体は先程殺された筈のメリオダスだった。

「なぜっ・・・!!」

急いで振り向き言葉を最後まで言わせる間もなくペテルギウスの
横顔に蹴りを喰らわせた。

「があッ!!」

蹴りを喰らったペテルギウスは部屋のドアを突き破り奥にある壁
に激突した。

「何、故デス・・・何故、何故何故アナタが、生きているのデス!!」

壁に座り込むペテルギウスは歩いて近づいてくるメリオダスを恨
めしそうに睨み叫び散らした。

「さっきお前が倒したのはオレの神器によって創り出された分身だ。

三つの《獄炎》^{ヘルレイズ}を放った瞬間、分身を創り出し、割れた窓の外に出た
のさ。あの透明な筋がどんな能力か分からねえからお前が油断し
きった時を狙って攻撃した・・・お前の負けだ」

「・・・アナタ・・・怠惰、デスねえ・・・」

ザシユ・・・

ペテルギウスの前に立ったメリオダスはロストヴエインで振りか
ざして解説をした。そしてペテルギウスにトドメを刺そうとした瞬
間ニヤリと笑みを浮かべた事にメリオダスは違和感を覚えたが構わ
ずトドメを刺した。

「さてと、エリザベスを探すか!」

第29話

ペテルギウスを倒したメリオダスはエリザベスを探す為屋敷の中を駆け回っていた。

「メ、メリオダス!!」

「ホーク!」

二階のドアを開けた瞬間、部屋の中にいたホークが声を上げた。そして、ホークの横には血を流し床で倒れているエリザベスの姿が目に入った。

「エリザベス!!!」

メリオダスは直ぐにエリザベスに駆け寄り呼び掛けをしたが、エリザベスから返事は無かった。

「すまねえメリオダス・・・突然緑色の頭した豚野郎が来て、エミリアとエリザベスちゃんが・・・」

「・・・」

ホークの説明をメリオダスは黙って聞いていた。そして事を樂觀視していた自分自身を内心では責めていた。ペテルギウスが言っていた怠惰とはこのことだったのかとメリオダスはそう思った。

「俺が・・・俺がもつとしっかりしていればこんな事には・・・いつそ俺を串豚にでもしてくれえ!!」

「大丈夫だ。お前のせいじゃねえ・・・それにあの野郎、ペテルギウスは倒した。エリザベスも死んだ訳じゃねえ、ただ気を失ってるだけだ・・・後はエミリアだな。ホーク、エミリアが何処にいるか分かるか?」

「それなんだけだよ、辺りが血の匂いで上手く嗅ぎ分けられねえんだ」
それを聞いたメリオダスはエリザベスに応急処置を施しホークの上に乗せ、エミリアを探す事にした。

それから数時間、メリオダス達はエミリアを探すが全て空振りに終わった。空は既に薄橙色に染まり屋敷の中も薄暗くなりつつあった。ペテルギウスを倒してから敵の数は激減し、メリオダス達を襲う者は殆ど居なくなっていた。

「メ・・リオ・・ダス・・」

「エリザベス!!」

「エリザベスちゃん!!」

目を醒ましたエリザベスはメリオダスを見つめ微笑んでいたが、直ぐにその微笑みは消え焦った顔をした。

「危ない!!」

エリザベスはメリオダスの背後に迫り来る気配に気づき、メリオダスを両手で力いっぱい押して攻撃から庇った。

「かはっ!!」

次の瞬間、突然エリザベスの身体に人の腕程の穴が空いた。それを見たメリオダスは一瞬何が起きたか分からず、状況を理解出来ずにいた。そしてだんだんと脳が状況を認識し始めた。

「おっと、勘のいい娘デスねえ。本来ならばアナタを狙ったのデスがズレてしまった。それにしても録に周りを警戒せず背後からの攻撃を許すとは怠惰デスねえ!!」

「・・あ・・あ・・あ・・」

「おや? まだ混乱しているようデスねえ! いい加減理解しなさい!! この状況を!! そして受け入れるのデス!! 己の怠惰を!! アナタの怠惰のせいで彼女は今、命の危機に瀕しているのデス!!」

そこにいるのは先程メリオダスが倒した筈のペテルギウス、ではなく別の女性だった。しかし、喋り方や仕草はペテルギウスそのもので非常にペテルギウスと酷似していた。だが、今のメリオダスにそれは関係無い。目の前で最愛の人が大量の血を流しているのを見て彼女の話など録に聞いていなかった。

「ああああああああああああああああああ!!!」

「良いデスねえ!! その叫び声!!! 正しく己の怠惰を嘆くに相応しい声デス!!!」

「さつきから聞いてりやいい加減にしやがれ、この豚野郎!!!」

絶叫するメリオダスと邪悪に笑うペテルギウスの間に割って入って来たホークはペテルギウスの前に立ちはだかった。

「何デス？アナタは？」

「俺様は残飯処理騎士団団長ホーク様だ!!お前の相手はこの俺様だ!!」

「喋る豚・・・これはこれは何とも珍妙な生き物デスねえ！面白い、アナタの全霊をもって私にかかって来なさい!!」

するとホークは身体を曲げるペテルギウスに向かい走り出した。

「くらえ!!《ローリング・ハム・アタック》!!!」

回転力を加えた高速突進をペテルギウス目掛けて突っ込んだが難なくペテルギウスの見えざる手で弾き飛ばされてしまった。

「プゴ!!いてててて・・・テ、テメエ中々やるな!!だが、これで終わりだアア!!《スーパー・ロース・イリユージョン》!!!」

幻影が見える程の高速移動でペテルギウスに追撃したがまたもや当然の如く見えざる手で弾き飛ばされてしまった。

「くううく・・・最早これまでか・・・もう、豚足一本も動かせねえ・・・

お前の勝ちだ・・・」

「・・・さて、此方は半魔の娘を探し試練を行わなければ・・・」

「無視かい!!」

ペテルギウスに無視されたホークは叫んだが限界が来たらしく気絶してしまった。そしてメリオダスはエリザベスを抱え膝を着いていた。周囲には魔神の力による闇が漂い、メリオダスの身体に纏わりつつあった。

第30話

「・・・」

スバルはレムとメリオダスに宿に置き去りにされてから一日掛けてアーラム村まで帰ってきた。しかしアーラム村を見て回ると普段の活気さは無く、あるのは死体の山と血の海だけだった。

そしてロズワール邸に目をやると煙が立ち上がっていた。それを見てスバルは急いで屋敷に向かった。

「・・・レム？」

屋敷に着くと数名の黒装束の人が炎に焼かれたような死体、更にはレムが持っていたモーニングスターも転がっており所々血がこびり付いていた。そしてその先には背中にナイフが刺さったレムが仰向けで死んでいた。

「あ・・・ああ・・・」

ふと周りを見ると小さな小屋があった。地面には血の道筋が出来ていてその小屋を指していた。小屋の扉を開けると扉にもたれかかって死んでいたラムと目をくり抜かれたペトラがスバルの足下に倒れ込んできた。その光景を見たスバル思わず嘔吐してしまった。

「違う・・・違う！俺はこんな・・・」

漸く立ち上がったスバルはふらふらとした足取りで屋敷の玄関まで入った。だが屋敷に入った瞬間、肌に突き刺さる様な殺気、そして禍々しい雰囲気ガスバルにも分かる程色濃く出ている。どうやらこのドス黒いオーラは二階へと続いていて、スバルはそれを辿って足を進めた。

「ん、ん、ん、何が・・・」

行き着いた場所は少し広めの空間だった。そこでスバルが見たものは隅っこで気絶しているホーク、その近くで敵と思わしき女性の上半身、残りの半身も無造作に置かれてあった。そして・・・

「・・・メリ・・・オダス・・・？」

「・・・」

血塗れのエリザベスを抱えて膝を着き俯いているメリオダスだっ

た。どうやら禍々しい雰囲気も殺気もメリオダスが放っていたようだ。しかしエリザベスはまだ微かに息をしていることにスバルは気づき手を伸ばした瞬間

「っ!!!...うあああっ!!!」

スバルの右手が消失していた。そのショックで思わず尻もちをつき、右手の切り口から血が大量に流れていた。

「...触るな...オレの女に、気安く触るな...!」

メリオダスはエリザベスを強く抱きかかえスバルを睨みつけた。そしてスバルは確信した、もし次二人に近づいたら確実に殺される事を。なのでスバルは二人を置いてエミリアを探し出した。

だがエミリアは見つける事が出来ず無意識のまま扉のドアノブに手を掛けた。そこは妙に肌寒く広い一本道だった。その先にはまた扉があり、それを開けようとしたら突然手に激痛が走った。スバルはドアノブに目を向けると自分の指が凍りつきへばりついていて。それに驚いたスバルは周りを見てみると、先程焼け死んでいた黒装束の連中が全身氷漬けになっていた。そして聞き覚えのある声が耳をかすめた。

「もう遅すぎたんだよ...」

その声と同時にスバルの身体は凍りつき砕け散り絶命してしまっ

第31話

「スバル君?」

先程までスバルはロズワール邸の内部に居た。そして今はルグニカ王国王都のカドモンの店の前、ここでスバルは膝を地面に着け気づいた・・・死に戻りした事に・・・

「スバル君!? 具合が悪いんですか!」

「おい、大丈夫か?」

心配の眼差しでスバルに駆け寄るレムとメリオダス。スバルは涙を流しながらレムに抱きついた。その様子見たカドモンは店先でイチヤつかれたと思いい文句を言い、周りに居た人達からも注目を浴びていた。しかしレムとメリオダスだけがスバルの様子がおかしくなっていた事に気づいていた。

「これはもうお手上げって言うしかにやいかな。身体の傷は兎も角、心の傷はどうしようもにやいからね」

「原因は何か分かっているのか?」

「さあな、魔力や呪術による影響でも無さそうだし。皆目見当がつかないねえや」

「・・・」

王都からカルステン家に戻って来たメリオダス達はフェリスにスバルの容態を見てもらったが原因は分からず治療は不可能だった。だがスバルから漂う魔女の瘴気が以前より濃いものになっている事にレムだけが気づいていた。

「お世話になりました。今日までのご厚意、主に変わって御礼申し上げます」

「そちらもエミリアに伝えてくれ。互いに己の魂に恥じぬ闘いをしよう」と

フェリスでも治せない事が分かったので一度ロズワール邸に戻ることにしたメリオダス一行。しかしフェリスは一つ疑問に思っている

る事があった。

「屋敷に戻るのとは分かるけど治す当てがあるの？」

「時々ですけど名前を口にするんです。レムやメリオダス君や姉様、それに・・・エミリア様。あのお方にお会いできたなら何か変化があるかもしれません」

レムは繋いでいるスバルの手をギュツと強く握りしめた。その様子を見たクルシユは何故レムがスバルに対してこれ程尽くすのか気掛かりであったがレムは少し考え特別だからだと答えた。その答えにクルシユとフェリスは哑然としていた。

「全く・・・ナツキ・スバルは果報者だな」

「いやあモテる男は辛いですなあ、スバルさんや？」

「そんなにや事言つて、メリオダス君にも恋人がいるんでしょ？隅に置けにやいんだから〜」

メリオダスはスバルをからかうが勿論返事は無い。その代わりにフェリスから反撃が来た。

「それじゃあオレ達はそろそろ行くぜ。二人とも世話になったな」

「ああ。メリオダス、卿が何者なのかそれ以前に人間なのかどうか私には分からなかったが、少なくとも魔女教である事は無い。それは私が保証しよう。なので周りの人間に何を言われようが気にする必要は無い」

「おう。サンキューなクルシユ。お前には随分と助けて貰っちゃったな。今度何かあった時は是非呼んでくれ、オレが手を貸すぜ！」

「ふふつ、それは頼もしいな・・・ところで、さんきゅう・・・とは何だ？」

「スバル君によると「ありがとう」という意味と聞いております」

「なるほど、異国の言葉と言う奴か・・・まあいい。それでは達者でな」

話が終わるとレムは一礼しメリオダスは手を振って別れを告げた。しかしスバルは相変わらず無反応だった。それからヴィルヘルムの用意した竜車に乗りカルステン家を後にした。

第32話

カルステン家から出発したメリオダス達は一晚野宿をして再び口ズワール邸に向けて竜車を走らせた。竜車はレムが操縦してその隣にスバルが座り、メリオダスは竜車の中で寛いでいた。

「レム、なんか静かすぎねえか？」

メイザース領に入りアールラム村の近くまで来た所でメリオダスは異変に気づいた。

「ええ、そうでーっ!!」

急にレムが苦しみ始めたのでメリオダスはレムに駆け寄った。次の瞬間、突然乗っていた竜車の地竜の首が飛んだ。そしてバランスを崩して竜車ごと地面に転がりスバルは外に投げ出された。

「あ．．あ、ああ．．．」

スバルは目の前の黒装束を着た人に恐怖を抱いていたが相手はスバルに手を差し伸べる様な素振りを見せたが瞬時にレムのモーニングスターで殺されてしまった。

「魔女教徒．．．!」

「魔女教徒ってロズワール達が言ってた奴等か．．．」

レムとメリオダスが考えている間に他の魔女教徒達が炎の球を投げつけてきた。それをメリオダスの全反撃で跳ね返し、レムは遠くに居た魔女教徒を蹴り殺しモーニングスターで一蹴する。

「ほっ!」

次々に襲いかかって来る魔女教徒達を一瞬の内に撃破して行く。右方向から無数のナイフが迫って来ていたのでそれを全て受け止めて投げ返して魔女教徒達は血飛沫を上げて倒れ込んだ。

「っ!スバル君が!!」

今の攻防の隙に魔女教徒の一人がスバルを連れ去ってしまい、もう既に見えない所まで移動していた。

「レムはスバルを探してくれ。オレはこいつらを片付けたら直ぐに向かう!」

「分かりました!」

そう言ったレムは共感覚でスバルの居場所を割り出し全速力でその方向に向かった。数名の魔女教徒がレムにナイフを投げて攻撃を仕掛けたがそれはメリオダスによつて全て阻止された。

「お前らの相手はオレだ」

笑みを浮かべながら挑発するメリオダスに対して魔女教徒達はムキになった様に襲いかかり一蹴されていた。

そして暫く戦いは続き最後に残っていた魔女教徒を撃破し一息ついていた。

「これで全部か？さつきとスバルを探さなきゃな」

「相変わらずのお手並みね、メリオダス様？」

「お前はー！！」

突如背後からメリオダスに話しかけて来た少女。しかしその声には聞き覚えがあり、慌てて振り向いたメリオダスは少女の名前を言う前に目の前に広がっていた森や道が消え一瞬にして世界が漆黒に染まった。

「《暗澹の繭》……この暗黒世界からは絶対に逃げられないわよ？」

「……メラスキュラ！」

第33話

メラスキュラの魔力によって暗黒世界に閉じ込められてしまったメリオダスは困惑していた。

「何故、お前がここに居る？」

「・・・魔神王様からの命よ。貴方を探せ、とね。苦勞したわよ？ 貴方の魔力を探し出して獄門を開くのは。何せ世界そのものが違うから予想以上に時間が掛かってしまったわ」

メラスキュラはにっこりと笑みを浮かべメリオダスを見下ろしている。

「それにしてもあの忌わしい女神も居るなんて、ホント腹立たしいわ！」

「メラスキュラ、オレを此処から出せ」

「出す訳ないでしょ。貴方を逃がしたら魔女教とか言う連中が好き勝手出来ないもの」

メラスキュラの口から魔女教と言う言葉が出て来た事にメリオダスは驚き、何故メラスキュラが魔女教の味方をしているのか理解出来なかった。

「いつから魔神王から魔女に鞍替えしたんだ？《信仰》の戒禁を持っているお前らしくないぜ？」

「ふぎけないでちょうだい！私が信仰しているのは魔神王様だけ！！魔神王様がこの世界の魔女とやらの興味を示されたから、調査として味方してやっているだけよー！」

「そういう事か・・・これで疑問が一つ晴れたぜ」

「なっ！・・・まあ、そういう事だから貴方を此処から出さないわ。せいぜい魔女教徒達に愛するエリザベスが命を奪われるのを想像してなさい」

そう言うとメラスキュラは闇の中に消えて行った。疑問が一つ晴れたとはいえこの暗黒世界から抜け出せないと言う状況は変わらない。

エリザベスは記憶を取り戻した三日後にメリオダスの目の前で死

ぬと言う呪いにかかっているので死にはしないが他の住民は別だ。

なのでメリオダスは一刻も早く暗澹の繭から脱しなければ行けないのだが・・・

メリオダスはどうかして抜け出そうと足掻いていたが全ては無駄な努力だった。

メラスキュラ曰く「この暗澹の繭はゼルドリスが魔神王の魔力を行使しない限り破れない」出そうだ。

そしてメリオダスは脱出できないまま数時間の時を過ごし、ある一つの方法を思いついた。

ー殺す・・・殺す・・・

魔女教のアジトと思わしき洞窟の中から腕を鎖に繋がれた少年がぶつぶつと呟いている。先程まで抜け出そうと暴れていたのか、手首からは血が流れ袖にまで染み付いている。そんな彼の前方から何か近づいてくる。

その正体はロズワール邸のメイド姉妹の内、妹、レムだった。しかし彼女の手足は骨が折れており、地面を這いつくばりながら鎖に繋がれた少年ーナツキ・スバルの下に向かっていた。

「レム・・・レム・・・！」

「・・・ヒュー・・・マ・・・！」

スバルはレムを自分の下まで引き寄せて呼び掛ける。そしてレムは最後の力を振り絞って魔法を詠唱しスバルの鎖を外した。

「生、き・・・て・・・！」

「レムー！」

「大・・・好き・・・！」

レムはそれだけ言い残した後、静かに息を引き取った。スバルは泣くことした出来ず、彼女の死に対する慟哭が洞窟中に響き渡った。

暫くしてスバルはレムを抱えて洞窟を抜け出しロズワール邸に向かおうとした。辺りはすっかり夕方になり空もオレンジ色にそまっ

ていた。

「行こう、レム……」

途中アールラム村を通ったが既に村の住民は惨殺されていたがスバルはそれに目を向けること無く、ただひたすらある男の名前を呟き続け歩いていた。

ロズワール邸が見えて来た所で既に辺りは吹雪いており屋敷の庭では巨大なオオカミの様な猛獣とスバルが見たことの無い形態のメリオダスが激闘を繰り広げていた。

あれは殲滅状態アサルトモードと言い、ブリタニアでの3000年前、魔神族の先鋭部隊《十戒》の統率者だった頃の姿だ。

「メリ、オ……ダス？」

しかしメリオダスをよく見ると常時不敵な笑みを浮かべている、その様子からまだまだ余裕……と言うより、おそろく彼にとってあの猛獣との戦いは”ただの遊び”なのだろう。

「っ！……うわあああ!!!」

その戦いに見入っていたスバルは戦いの余波で身体は凍りつき黒い炎によって粉々になってしまった。

第34話

「ん、すっかり暇だなあ」

現在メリオダスは王都の街中を歩いている。特に目的があるという訳ではなくただ暇を潰しているだけだ。

「スバルのやつ、いったい何をそんなに焦ってたんだ？」

そんな事を呟き、先程スバル達と別れた際にスバルから言われたことを思い出す。

「・・・悪い、メリオダス。お前は暫くの間街でも散歩してきて来てくれ・・・俺は少し用事を思い出した」

そう言うときスバルはレムの手を引っ張ってスタスタと歩いて行った。その時のスバルの顔には何者かに対する怒り、そしてメリオダスに対する恐怖があった。

「ま、考えても分からねえし、ちよつと酒場にでも・・・」

「昼間から飲酒とは感心しないな。メリオダス」

酒の誘惑に魅了されていたメリオダスに声をかけた赤い髪を靡かせこちらに微笑みを見せている美青年、王国最高戦力である『剣聖』ラインハルト・ヴァン・アストレアだ。

「よお、こんな所で会うとは奇遇ですな。一緒に飲む？」

「嬉しい誘いだけど、僕は遠慮しておくよ」

しかしメリオダスの誘いは即答で断られてしまった。

「ところでメリオダスはどうしてここに？てつきりスバルと一緒に行動しているものだと」

「ああ、あいつなら用事があるってどっか行っちゃった。んでオレは暇潰ししてたんだ。ラインハルトも暇なのか？」

「僕はこれから任務だよ。だけどそれまでまだ時間があるから王都を巡回してたんだ」

つまりラインハルトもメリオダスと同じ暇人なのだ。するとメリオダスはあることを思いついた。

「それならオレと模擬戦でもしてみねえか？時間はまだあるんだろ？」

「僕がメリオダスと？確かに時間はまだあるけど、しかし・・・わかった。じゃあ闘技場に行こう。そこなら周りに気を使わずに済む」

メリオダスの提案にラインハルトは少し悩み快諾した。そして二人は闘技場に向かった。その闘技場というのは嘗てスバルとユリウスが闘った場所。いや、守られたと言っても過言では無いだろう。

「助かったぜラインハルト。ここに來てから大分体が訛ってたからな」

「君が喜んでくれるなら僕も嬉しい限りだよ」

準備運動をするメリオダスとただ静かに佇むラインハルト。暫く静寂が続いたがその静寂はインパクトと共に終わりを告げた。

メリオダスが顔面に目掛けて放った蹴りはラインハルトによって容易に防がれてしまう。しかしメリオダスはそれに動じること無く続けて連撃を放つ。

「かなり強いね、メリオダス」

「涼しい顔で防いでるやつに言われてもな！」

そう言い終わると一度メリオダスはラインハルトから距離を取り背中のロストヴェインを抜いた。

「ラインハルトもその腰の剣抜けよ」

「すまないメリオダス。実はこの《龍剣レイド》は來るべき時にしか抜けない様になってるんだ」

「なるほど、そんなじゃこれならどうだ？」

メリオダスは力を入れ集中し、そして黒いオーラが身体を覆い始めた。徐々に瞳が黒く染まり額に黒い紋章が浮かび上がり自身の闘級も跳ね上がる、魔神化だ。

「どうだ、抜けそうか？」

「・・・いや、まだ抜けそうにないね」

なんとメリオダスの魔神化でさえも龍剣レイドは抜けなかった。さすがにメリオダスも少し悔しそうな表情をしている。

「まあ良いさ。せっかくだからこのままやっちゃまおうぜ！」

ロストヴェインを鞘に戻しラインハルトに殴り掛かった。先程とは違ってメリオダスの攻撃は入りつつある。

しかし次の瞬間メリオダスの脇腹に衝撃が走る。
ラインハルトの蹴りだ。

その衝撃でメリオダスの身体は遠くに吹き飛ばされてしまった。だが透かさず地面を強く蹴り真つ直ぐラインハルトに突っ込み腹部に拳を叩き込む。

それによって一步後ろに下がったラインハルトに回し蹴り、肘打ち、裏拳の順で攻撃を決める。

飛ばされたラインハルトは空中で体勢を立て直し着地する。

「殆ど効いちやいねえか・・・思ってた以上に厄介だな」

「メリオダスこそ、まだまだ本気じゃないんだろう？ 街に被害が出ていないのが何よりの証拠だ」

「と言っても多少揺れただろうけどな。それじゃあ続きを」

「残念だけどここまでだ。任務の時間が来てしまった」

「そうか・・・結構楽しかったぜ！」

ラインハルトの言葉を聞いて魔神化を解き臨戦態勢も解いた。そして二人は別れを告げてそれぞれ帰る場所へと帰って行った。空はすっかり暗くなり街の灯りを頼りにカルステン家に向かったがスバル達は既にそこにはおらずクルシユから大体の事情を聞き宿へと向かった。

第35話

「なあスバル。これからどうするんだ？」

「まずは屋敷に帰る。そっからラムやエミリア達を連れ出す……何処でもいい。とにかくあの場所は危険なんだ！」

夕方レムの操縦する竜車でこれからの事を話すスバルの顔は焦りが見える。メリオダスは何故か怪我をしているスバルに疑問を覚え、たが竜車が進む先にこちらに向かつて手を振る青年を見つけたのでその疑問を取り敢えず飲み込んだ。

「どうやらこの人達は商人でここで野営するつもりらしい。疲れた地竜を休ませる為に少しの間休憩することにした。」

「これからメイザース領にですか？もう夜ですし危険ですよ。僕らはここで野営するつもりなので良ければご一緒しませんか？」

「そんなこと言っただけじゃないのか。オットー？」

先程手を振っていた青年オットー・スーウエンの失敗談を商人の皆で笑っている。

「そんなつもりありませんよ。ま、まあ確かに少しでも油をご利用いただければと言う欲が無いと言えは嘘になりますが……」

「油がどうかしたんですか？」

「今の時期、売り物として価値が微妙な油を大量に抱え込んでるんです」

その言葉を聞いた瞬間スバルは何か思い付いた様な顔をする。

「王都に行ってもこの油を全部捌ききれるか分かりません……そして僕は破産です！……破産です」

絶望的な状況に嘆くオットーにスバルが商談を仕掛ける。それは油を全部買い取る代わりにメイザース領まで連れてつてくれと言う内容だった。オットー以外の商人にもその商談を持ち掛けすぐに移動することになった。

「夜間も走り続けてメイザース領に入るのは朝方になるでしょうね」

「休憩無しで悪いな」

「いえいえ。在庫処分が出来る上に運賃も弾んで貰えるなら僕は無敵です！」

ガッツポーズで張り切るオットーを他所にレムが距離を確認したと言うのでスバルは携帯電話の明かりで地図を照らす。オットーはそれを不思議そうな目で見ていた。

「ん？あの木は確かフリーユゲルの大樹だったな」

「ああ、なんでも数百年前にフリーユゲルって賢者が植えたって伝承が残ってるんだとよ」

隣りに竜車を走らせていた商人の男がメリオダスの眩きを聞いて補足する。

「すげえ木だなあ。こりゃ見事としか言いようがねえ・・・」

フリーユゲルの大樹に気を取られていたスバルはふと隣りを走っていた竜車に目をやるとそこには誰も居なかった。

「・・・メリオダス、隣りを走ってたオツサンどこ行った？」

「何言ってるんだ。元々隣りには誰も居なかったろ？」

「・・・は？」

次の瞬間急に霧が発生すると共に獣のような鳴き声がスバルの耳に入る。近くに何かの気配を感じたスバルは恐る恐る携帯電話の明かりで周囲を照らす。するとそこには巨大なガラス細工の様なものがあり携帯電話の明かりが反射していた。スバルはガラス細工をじっと見詰めていると、なんとそのガラス細工が動き自分を見ていた。そこで少し考えあるものに辿り着くーこれはガラス細工では無い、眼だ。巨大な何かの眼がある事に気付いたスバルは驚き声を上げた瞬間その巨大な生物も再び吠える。その衝撃でスバルは吹っ飛ばされてしまい竜車を外へ投げ出された。

「スバル君！」

咄嗟の判断でレムがスバルをキャッチし竜車に着地する。すると巨大な生物が此方に身体を押し付けて潰そうとして来たのをメリオダスが蹴り飛ばして軌道を逸らした。

「何があったんだ！一体どういう事なんだ！」

「スバル君、立たないで！風避けの加護が切れています！」

「随分とタフなヤツだな。あのでけえのは何なんだ？」

「分からないんですか！霧の中、あんな巨体で空を飛ぶ存在なんて一つしかない!!」

スバルとメリオダスの疑問に竜車の手網を握りながら何とか答える。その顔には焦りや恐怖が入り混じっていた。

「――白鯨です!!」

第36話

「白鯨・・・？」

「説明してる暇はありません！今は逃げ切る事だけを考えましょう！」

スバルは突然の出来事で混乱していたが直ぐに正気を取り戻し白鯨を位置をレムに聞くが辺りが暗く見つけられなかった。他の竜車も逃げているようだが位置までは分からなかったようだ。

白鯨による暴風でまたスバルは竜車から投げ出されてしまったが鬼化したレムがモーニングスターでキャッチしそれと同時にメリオダスが襲い掛かってくる白鯨の胴体を上から殴る。

「はあっ!!」

白鯨は悲鳴を上げて地面に落下する。それを見てオットーは白鯨から距離を離す為一気に加速した。

「や、やりましたか!？」

「いや、大して効いてねえ。また直ぐに追っかけて来るだろうな」

そう言うメリオダスはまた竜車から離れ追いついてきそうな白鯨を迎撃しては地面や竜車に着地しまた迎撃するを繰り返す。

「・・・これじゃキリがねえな。レム、オレは白鯨を倒してくる。その間スバル達の事は頼んだ！」

「相手はあの白鯨です！いくらメリオダス君と言えど一人でなんて無茶です！」

「そうだメリオダス！今から俺が打開策を考えてやるから少し待っててくれ!!」

「心配要らねえよ。かるーくぶっ飛ばして来てやるぜ！」

心配する二人をメリオダスはいつもの笑顔で元気づける。この状況でそんな笑顔を見せられて呆気に取られている隙にメリオダスは竜車から飛び降り白鯨の元へ向かう。

「メリオダス!!!・・・くそっ!!」

メリオダスを止められなかったスバルは自分の無力さを嘆き竜車の床を殴る。

「何で執拗に僕らを・・・竜車は他にも居るでしょうに!!」

「泣き言言っても変わらねえ!!何か打開策を・・・考えろ考えろ考えろ!!」

スバルが必死に打開策を見つけようと頭を抱えている様子をレムは見ていた。

「スバル君、これを受け取ってください」

レムがスバルに手渡したのは商人達の報酬である大金が入った布袋だった。

「レム？」

「レムが竜車を降りてメリオダス君の援護をします。その間にスバル君は森を抜け出して下さい」

レムの提案にスバルは言葉を失う程驚いていた。そんなスバルを置いてオットーに報酬についてを話す。オットーはこんな状況で何を言っていると言いたげな顔をしている。

「スバル君、レムは頭が悪いのでこんな案しか思いつきません」

「待てよレム・・・行かせねえ、行かせねえぞ！お前まで死んだら俺は・・・」

ガタンツと竜車が揺れた弾みでスバルはレムを強く抱き締める。この時レムは自分は幸福なのだと思いきやこの瞬間が永遠に続けば良いと思った。

「レムはこの時の為に生まれてきたんですね・・・」

「何をー」

レムの手刀によりスバルの意識が遠のき、レムが竜車を降りるのを黙って見ている事しか出来なかった。

一方メリオダスは白鯨と激闘を繰り広げていた。白鯨の攻撃はメリオダスに当たる事はなく空振り続ける。何度も反撃を受けてまるでサンドバッグの様だ。しかしメリオダスの反撃を何度受けてもけろっとしている様子から防御力はかなりのものだ。

「本当にタフなデカブツだな」

白鯨は身体から霧を噴き出し視界を遮る。そして巨大な口を開け

地面を抉りながら進みメリオダスを飲み込もうとしたがメリオダスはそれをジャンプで避け一気に急降下し蹴りで白鯨を地面に叩きつけた。

「おおおおおおおっ!!!」

叩きつけられた白鯨の角を両手で掴みそのまま投げ飛ばした。そしてロストヴェインを構え白鯨を滅多斬りにして最後に後方へ飛び《神千斬り》を放った。苦悶の声を上げている白鯨の鮮血が辺りに飛散した。

「驚いたな。まだ生きてんのかー」

メリオダスが感心していると突如白鯨の目の色が赤くなり地面を揺らす程の咆哮が鳴り響く。メリオダスは驚き一歩後ろに下がった瞬間先程の霧の量とは比較にならない程の霧が白鯨の身体から噴き出し周辺を霧で覆い尽くした。

「くっ……はあっ!!」

メリオダスは魔神の力を纏わせた腕で霧を払うと目の前には既に白鯨は居らず平原だけが広がっていた。

次の瞬間背後から白鯢が尻尾で攻撃をしてきた。その攻撃をもらって受けたメリオダスは吹っ飛ばされフリーユゲルの大樹に激突する。

「いててて……. どういう事だ？白鯢が三体に増えてやがる」

「メリオダス君!!」

すると先程竜車で逃げた筈のレムが大樹の根元でメリオダスに向かって呼びかけてきた。

「レム！何でここに来た！」

「レムはやっぱり、メリオダス君を置いては行けません……. それにここで白鯢を止めなければスバル君が危険です！レムはスバル君がこれ以上壊れる様を見たくありません……. ですからどうか一緒に戦わせて下さい！」

レムの真剣な眼差しにメリオダスもそれに応える。

「……. わかった。レム、行くぞ！」

「はー」

そう言うとメリオダスとレムは三体に増えた白鯢に向かって行っ

た。

闘級設定

ーエミリア陣営ー

《メリオダス》

闘級：600000【魔力：4000／武力：52500／気力：／
3500】

魔神化←

闘級：1000000【魔力：7200／武力：88800／気力：
4000】

殲滅状態←

闘級：142000【魔力：23000／武力：111400／気
力：7600】

《ナツキ・スバル》

闘級：65【魔力：10／武力：20／気力：35】
権能：死に戻り

《エミリア》

闘級：3610【魔力：2800／武力：400／気力：410】
覚醒時←

闘級：???【魔力：???／武力：???／気力：???】

《パツク》

闘級：2935【魔力：2300／武力：5／気力：630】

星獣化←

闘級：120000以上【魔力：???／武力：???／気力：???】

《レム》

闘級：1970【魔力：540／武力：830／気力：600】

鬼化時←

闘級：2750【魔力：650／武力：1400／気力：700】

《ラム》

闘級：1860 【魔力：460 / 武力：800 / 気力：600】

《ロズワール・L・メイザース》

闘級：30800 【魔力：25300 / 武力：4400 / 気力：100】

《ベアトリス》

闘級：4525 【魔力：3600 / 武力：5 / 気力：920】

???
←

闘級：?? 【魔力：?? / 武力：5 / 気力：920】

ー クルシュ陣営ー

《クルシュ・カルステン》

闘級：3570 【魔力：800 / 武力：1900 / 気力：870】

《フェリックス・アーガイル》

闘級：2450 【魔力：1900 / 武力：60 / 気力：740】

《ヴィルヘルム・ヴァン・アストレア》

闘級：7200 【魔力：0 / 武力：6400 / 気力：800】

ー アナスタシア陣営ー

《アナスタシア・ホーシン》

闘級：395 【魔力：0 / 武力：15 / 気力：380】

《ユリウス・ユークリウス》

闘級：3190 【魔力：760 / 武力：1700 / 気力：730】

ープリシラ陣営ー

《プリシラ・バーリエル》

闘級：3950 【魔力：960／武力：2100／気力：890】

《アルデバラン》

闘級：840 【魔力：180／武力：230／気力：430】

ーフェルト陣営ー

《フェルト》

闘級：850 【魔力：160／武力：190／気力：500】

《ロム》

闘級：730 【魔力：0／武力：200／気力：530】

《ラインハルト・ヴァン・アストレア》

闘級：測定不能 【魔力：0／武力：???／気力：???】

龍剣レイドあり←

闘級：測定不能 【魔力：0／武力：???／気力：???】

ー魔女教大罪司教ー

《ペテルギウス・ロマネコンティ》

闘級：1460 【魔力：260／武力：100／気力：1100】

権能：怠惰、見えざる手

ー魔神族ー

《魔神王》

闘級：503800【魔力／???／武力：???／気力：???】

十戒《ゼルドリス》

闘級：610000【魔力：100000／武力：472000／気力：38000】

戒禁：敬神

十戒《エスタロッサ》

闘級：600000【魔力：300000／武力：530000／気力：40000】

戒禁：慈愛

十戒《メラスキュラ》

闘級：340000【魔力：315000／武力：50000／気力：20000】

戒禁：信仰

十戒《ガラン》

闘級：270000【魔力：100000／武力：240000／気力：20000】

戒禁：真実

十戒（代理）《フラウドリン》

闘級：310000【魔力：130000／武力：150000／気力：30000】

十戒《モンスピート》

闘級：560000【魔力：340000／武力：160000／気力：30000】

戒禁：沈黙

十戒《デリエリ》

闘級：52000【魔力：1500／武力：48000／気力：2500】

戒禁：純潔

十戒《グロキシニア》

闘級：50000【魔力：47000／武力：0／気力：3000】
戒禁：安息

十戒《ドロール》

闘級：54000【魔力：14000／武力：36500／気力：3500】

戒禁：忍耐

十戒《グレイロード》

闘級：39000【魔力：26500／武力：10000／気力：2500】

戒禁：不殺

《赤色魔神》

闘級：10000／13000

《灰色魔神》

闘級：27000／32000

ーその他ー

《エルザ・グランヒルテ》

闘級：3320【魔力：0／武力：2500／気力：820】

《マーコス・ギルダーク》

闘級：???【魔力：???／武力：1820／気力：810】

《魔女教徒》怠惰

闘級：640／740

《オットー・スーウエン》

闘級：442【魔力：122／武力：130／気力：190】

《巨獣アルビオン》

闘級：5500（一律）

第38話

「アル・ヒューマ!!」

レムが創り出した巨大な氷柱が分身した白鯨の内一体を突き刺す。それによつて白鯨は大きな悲鳴を上げるが高度が落ちる気配はない。「やはり見た目程効いていませんね・・・恐らく白鯨の体毛がマナを散らして魔法攻撃を軽減しているのでしょうか」

「魔力攻撃はほぼ無駄って事か」

「それだけではありません。あの分厚い肌は物理攻撃も弾きます。生半可な攻撃では無意味でしょう。でも・・・」

レムの説明を聞いた後メリオダスは直ぐに氷柱が突き刺さった白鯨に飛び掛る。そして半端に刺さった氷柱を蹴りによつて更に奥へと挟り込ませ、そのまま白鯨の体をロストヴェインで切り刻みながら駆け回る。

「メリオダス君には関係ありませんね」

その言葉の直後メリオダスは胸鰭、眼球を落とし、最後に傲慢の角を拳で叩き折って地面に着地する。しかし着地した瞬間を狙つてか二体目の白鯨がメリオダスに向かって咆哮を上げながら突進して来た。

「はああっ!!」

瞬時に鬼化したレムがモーニングスターで白鯨の眼球を潰し軌道を逸らした。

「メリオダス君、これからどうします?」

「レムは弱ってる方の白鯨をやれ。オレはもう一体と上空にいる奴をやる」

「それではメリオダスが白鯨を二体相手取る事になります!」

「大丈夫だ。多分、三体に増えた事でその分弱くなってる。オレの実像分身と同じ仕組みだ」

先程の攻撃でメリオダスはそう確信した。レムも納得したらしく再び鬼化しモーニングスターを構える。

「分かりました・・・それでは、ご武運を!」

レムは重傷の白鯨にモーニングスターを振り回しながら向かって行った。メリオダスはそんなレムを尻目にもう一度白鯨の方へ向き直る。

「さてさてさーて、スバルの事もあるしー」

迫り来る白鯨を前に一呼吸置き、メリオダスは意識を集中させ魔神の力を行使する。

「二気にけりをつけるか！」

そこからは早かった。魔神化したメリオダスは即座に白鯨を一刀両断し、それに気づいた二体の白鯨は瞬時に霧を発生させ姿を隠した。しかしメリオダスは難無く霧を剣撃による衝撃波で払う。白鯨も負けじと霧を放出し続けるので中々霧は晴れないがとうとう見つかってしまい二体目の白鯨も一撃で真つ二つに斬られた。

「あと一体だな」

三体目の白鯨を探すためにもう一度霧を払うが完全に霧が晴れた頃には空中に居たであろう白鯨は姿を消し、地上に転がっていた筈の死体はいつの間にも跡形もなく消え去っていた。

「逃げたか．．．ま、とりあえずさっさと屋敷に戻らねえとな！」

その頃にはもう既に朝になっており戦いの爪痕の残るブリュージェルの大樹周辺を後にした。その後メリオダスはメイザース領に入りアールラム村周辺まで来たところでメラスキュラに捕まり数時間囚われることになった。

第39話

メリオダスがメラスキュラに囚われて数時間が過ぎ、魔女教がロズワール邸を襲撃する。スバルは皆を逃がそうとしたが目の前でエミリアが殺されベアトリスの魔法で屋敷の外に脱出した。しかしペテルギウス達に囲まれ絶体絶命と言ったその時。

「死ね．．．下郎共」

パックが生み出した無数の氷柱が魔女教徒達を貫き一瞬にして全滅させた。

「パック!!」

侮蔑の眼差しを向けるパックはスバルの声に反応する。

「黙ってなよスバル。別に君はー」

その言葉の途中でパックの体は捻れた。これはペテルギウスの権能《見えざる手》だ。スバルにだけ見えているので傍から見たら急に捻れた様に見える。

「油断、怠慢、即ち怠惰。貴方は私を即座に仕留めるべきだったのデス。その力が有りながら貴方は成すべき事を怠ったのデス！」

「下らない．．．本気で僕を殺したいなら、サテラの半分千は影を伸ばして見せろ！」

その台詞と共にパックは見えざる手を払い化物へと姿を変えた。おそらくこれがパック本来の姿をなのだろう。

「有り得ない、あつてはならないのデス！ただの精霊が私の信仰を、愛を捧げた全てを、精霊風情がああ!!」

「たかが生まれて数十年の人間が精霊相手に時間を語るな」

自分の指を噛み切り自虐しているペテルギウスの体が徐々に氷結して行く。

「信仰の深さに時間など関係ないのデス！悠久の時を生きるが故にその大半を無意に浪費する貴方のような愚か者と一緒にしないで貰いたいものデス！ああああああ、脳が震えるう!!」

狂気じみた笑みを浮かべるペテルギウスの背後から突然黒い炎が迫ってくる。そして着弾し氷結しかけたペテルギウスの体は粉々に

散って行った。

「人間ごときが優劣を付けるなど、おこがましい」

上空からペテルギウスを狙い撃ちしたのは、殲滅状態アサルトモードになったメリオダスだった。この姿のメリオダスを見るのはスバルにとつては二度目の事、そして唯一の希望がたつた今消えた。

「そこに居るのはスバルか、エリザベスは何処だ？」

突然話しかけられたのでスバルは驚き状況を軽く説明しようとした。

「エ、エリザベスならホークと一緒にベアトリスの禁書庫に入ってもらった・・・多分無事だ」

「そうか・・・」

そう言うとメリオダスは屋敷の方へ向かおうとしたがそれはパツクによって阻止された。

「随分と禍々しい姿になったね、メリオダス」

「お前が言うな。それよりも何故オレの前に立ち塞がる？」

「君をここで逃がしたら世界を滅亡させるといふ僕の目的の邪魔になる」

「せっかく見逃してやろうとしたのに・・・愚か者が」

先手を取ったのはパツク、巨大な氷柱が直撃した後更に無数の氷柱を氷漬けになったメリオダスに向かって放つ。

「君は確かに強い。でもそれだけでは僕には勝てない。まあ、年季の差ってやつかな」

メリオダスをじつと見据えるパツクは勝利を確信したと思えばスバルの方へ体を向ける。しかし――

「たかが数百年生きた程度で年上気取りか？」

「バリンツ!!という音と共にパツクの勝利は取り消された。

「へえ、今のをくらつても尚無傷か・・・これは少々骨が折れそうだ」
「小動物の分際でまだ勝つ気にいるのか？」

「当然だ。魔族風情があまり調子に乗るな！」

先程とは比較にならない威力の氷魔法をぶつけるが全反撃によつて跳ね返されパツクもそれを叩き落とす。すぐさまメリオダスは

バックの顔面を蹴り上げ斬撃で全身を斬りまくる。
「魔族？そんな低次元のものと一緒にするな。オレは魔神族、十戒（統率者）メリオダスだ！」

第40話

「オレは魔神族。十戒〈統率者〉メリオダスだ！」

「魔神族？ おこがましいのは君だ、メリオダス。この程度で神を名乗るなんてね」

メリオダスの攻撃は、パックには大して効いていなかった。

「準備運動は終わりだよ」

飛びかかりメリオダスを地面へ叩きつけ、そのまま押し潰す。その衝撃で地面が凹み亀裂が走る。

「準備運動と言うのも案外嘘では無さそうだ」

地面を押さえつけていたパックの右前脚がメリオダスの獄炎によつて爆発し思わず脚が離れる。

「“お手”の次は、“お座り”か？」

闇を纏わせた左手をパックへ向け強く握る、今度はその手を振り下ろす。

闇はメリオダスの動きに合わせてパックの体を覆い締め上げ地面に叩きつける。

「くっ……！」

悶えるパックに追い討ちをかけるようにメリオダスは力を入れる。更に重力が増し最早ミンチになるのは時間の問題かに思われた時、パックの大氷結が闇を突き破つてメリオダスに直撃する。

「もしかして勝つたと思った？ 君は僕を舐め過ぎだよ」

「……それはお前も同じだ」

爆煙の中からゆっくりと姿を見せるメリオダスは余裕の笑みを浮かべている。

「これが全力か？」

「安心していいよ。次は僕も本気で行くから」

そう言った瞬間、パックの右前脚がメリオダスを弾き飛ばし、パックもそれを追いかけて飛びかかる。

噛み砕こうとした口を蹴り上げ、それに負けじとパックも鉤爪で引っ搔く。

「ッ……！」

ロストヴェインでは防ぎきれず体の数ヶ所から血が噴き出す。互いに一步も譲らない攻防が続いている。

二体の化物の戦いを無気力に見詰める少年の眼に生きる希望は無い。村は壊滅し大切な人も死なせてしまった、もう既に詰んでいる。(……殺してくれ……殺してくれ！)

辺りに転がる魔女教徒の凍死体、そしてエミリアの死体も雪に埋もれていくの見ながら死を願うスバル。

すると突如轟音が止む。視線を向けるとそこには地面に倒れ伏すパックとそれを見下ろすメリオダスが居た。

「全力を出さぬまま倒れるとは……」

パックもメリオダスも全力で戦っていなかった。

メリオダスは自身の力が強すぎるが故の油断。

一方、パックはメリオダスの様に舐めていた訳ではなく、近くに居たエミリアを巻き添いにしてしまう為、本気で戦えなかったのだ。

「ふん……」

そしてメリオダスは興味が失せた様に屋敷の方へ顔を向け飛び去ろうとしていた。

「待ってくれ、メリオダス！」

そんなメリオダスをスバルは呼び止める。それに応じてメリオダスも止まりスバルを見下ろす。

「……お前は、レムのことを覚えてるよな？ ラムもエミリアもエリザベスもおかしいんだよ。皆レムを知らないって言うんだ！あいつは俺達にとつては掛け替えの無いー」「スバル」……メリオダス？」

何かに縋る様に同意を求めるスバルにメリオダスはただ無表情で答えた。

「ー誰だそいつは？」

スバルの期待とは裏腹に返ってきたのは否定だった。

「・・・は？ 誰ってお前・・・昨日まで一緒に居ただろうが！」
「寝ぼけてるのか？ 昨日もその前の日もレムなんて奴は居なかっただろう」

「じゃあ、白鯨は・・・此処に来る途中、白鯨はどうしたんだよ！ レムと協力して倒したんじゃないのかよ!!」

「白鯨の分身体なら殺したが、本体には逃げられた。その時もオレ以外誰もいなかったぞ？」

白鯨が分身したと言う発言にも驚いたが今はそれよりも最近まで一緒に居た筈のメリオダスまでもがレムのことを忘れてる事に驚愕する。

「・・・他に無いならもう行くぞ」

そう言つてメリオダスは呆然とするスバルを置いて屋敷の方へ飛び去つて行つた。

(そんな・・・メリオダスも、レムを忘れたつてのかよ・・・！)

この世界に心底絶望したスバルは“戻る”べく自殺することを決意し今まさに自らの舌を噛み切ろうとした瞬間、先程まで倒れていた獣が目を覚ました。

「ー全く、僕はまだ死んでいないんだけどね」

「!!」

「それとも敢えてトドメを刺さなかったのか・・・相変わらず何を考えてるか分からない男だ」

死んだと思っていたパツクはなんと生きていたのだ。しかし重傷を負っているのでかなり弱っている。

「ああ、そういえば居たんだったね」

スバルの存在を確認したパツクは力を振り絞り起き上がりメリオダスと同じ様にスバルを見下ろす。

「さて、話しをしようか。スバル」

ロズワール邸内部、殲滅状態と化したメリオダスは虱潰し扉を開け

て禁書庫を探していた。その間屋敷内に潜んでいた魔女教の生き残りが数名が死角から攻撃をして来たがそれを一瞥もくれること無く返り討ちにあっていた。

「おや？ アナタは・・・こんな所で再びお会いするとは奇遇デスねえ」
廊下の奥から何者かが近づいてくる。それは先程メリオダスが殺した筈のペテルギウスと容姿は全くの別人であるものの言葉遣いや仕草が酷似している男が暗闇から姿を現した。

「私は魔女教大罪司教へ怠惰」担当、ペテルギウス・ロマネコンティ：デス!!」

「・・・ふん」

名乗りだしたペテルギウスに興味が無いと言いたげに嘲笑する。

「先程の背後からの攻撃は見事！ それに比べ私は何と愚かな、眼前の獣に気を取られてアナタの存在に気づかなかったとは・・・ああ」
怠惰怠惰怠惰アア!!」

自ら自虐行為に走るペテルギウスを無視してメリオダスは高速接近し素早く蹴りを繰り出した。勢い良く蹴り飛ばされたペテルギウスの足を掴みそのまま床に叩きつけその衝撃で床が抜け落ち下の階へ落下していく。

「ッ！」

終わったと思われたその瞬間、無数の“何か”が背後から出てきてメリオダスの体を押さえつける。

「油断しましたねえ。怠惰なる我が権能《見えざる手》デス」

背後に居たのは先程の男性とはまた違う男性、しかし今メリオダスの背後に居るのは間違いなくペテルギウスだ。

「・・・どういう仕組みだ？」

それは見えざる手を指しているのではなく殺した筈のペテルギウスが何故こうして姿を変え生きているのかという疑問だった。

「知ったところで意味が無いのデス！ 今からこの私が怠惰なるアナタを・・・殺すのデス!!」

そう言うとペテルギウスは力を入れてミンチにしようかと試みるがメリオダスは微動だにしない。それどころか体に全く変化が無い様

な素振りをしている。

「この程度か？ 権能とやらは」

「・・・バカな。あの獣だけでなくアナタまでも・・・こんな事、あるはずが無いのデス！」

同様の余りメリオダスから見えざる手を一旦引き戻す。

「私の魔女に対する信仰を、愛を、アナタの様なものに妨げられて良い筈がないのデス!!!」

再びメリオダスを殺さんと見えざる手を伸ばして来るがそれよりも速くペテルギウスの懐に潜り込む。

「見えざる手、か・・・見えていれば大したことはない。最も見えていようがいまいがオレの脅威にはならんがな」

「何故デスッ!!・・・「まだ気づかないのか？」・・・な！ これは・・・！」

伸ばした見えざる手を確認すると微小だが獄炎を纏っていた。それに今気づいたペテルギウスは自らの怠惰を自覚する。

「体に触れていた時、既に獄炎を纏わせておいた。流石に気づくと思っただが・・・余程動揺していたようだな」

メリオダスは拳を強く握り、そのままペテルギウスの腹部を貫く。「貴様自身の体は人並みだな」

「がっ・・・あ・・・ああ・・・」

そしてメリオダスとはどめに獄炎でペテルギウスを焼き尽くす。「・・・脳が、震・・・える・・・」

それを最後にペテルギウスは絶命する。

――同時刻、スバルも死亡した。

第41話

死に戻りによってスバルはセーブ地点まで遡り、一度は全てを捨ててレムと逃亡する道を選ぼうとしたが、レム本人に勇気づけられ再びエミリア達を救出することに決めた。

「エミリア陣営とクルシユ陣営での対等な条件での同盟。その為に此方が差し出す物は白鯨の出現時間と場所、これが俺が切れる手札カードだ！」

昼間スバルが突然レムを連れてどこかへ行ってしまった後、オレはラインハルトと模擬戦をした。一応引き分けて形になったけど、そのまま続けていたらオレは倒されていた。

そこからカルステン家に帰る途中、スバル達と合流しある程度この商談の流れは聞いた。

にしても今朝から雰囲気があるで違うな。淡々と話しを進めるスバルを横目で見てそう思った。

これは、何かを決意した目だ。

「なるほど。にわかには信じがたいが、そのミーティアで白鯨の出現時間が分かると」

「信じてくれるのはありがたいけど、そんな簡単に信用して良いのか？」

「クルシユには風見の加護があるから嘘は通用しないらしいぜ？スバル」

「そ、そうなのか・・・」

「やっぱオレと話す時少しぎこちないな。前はそんな事無かったんだが。」

「んでクルシユ、同盟を認めてくれるのか？」

「同盟を結ぶかどうかとその情報を信じる信じないかは別個の問題だ」

だろうな、これはこの国の未来を左右する判断だ。そう簡単に上手くは行かない。

「そのお話し。ウチらも聞かせてもらってええ？」

扉を開けて出てきたのは王候補の一人アナスタシア・ホーシンとラツセル・フェローだ。手筈通りさつきから扉の前で機会を伺っていたらしい。

「卿等と呼んだのはナツキ・スバルか？」

「正確言えばそっちの青髪の子とメリオダス君やね。大まかにしか聞いてへんけど白鯨討伐の話しが本当なら大いに期待するわ。白鯨の居る居ないは商人にとって死活問題やから。ああもちろんウチの傭兵団も手え貸すよ」

「私は白鯨討伐はもちろん、ナツキ殿に提案された魔鉱石の採掘に興味があります。もし同盟が成立すればクルシユ様を通じて手付かずの魔石が大量に王都に流れる事になります」

アナスタシアとラツセルがそれぞれ経緯を話し終わるとオレはスバルに代わって前に出た。

「オレ達が差し出せるのは魔石の採掘権の一部と白鯨の出現時間と場所の情報。それでも足りなけりや、今後クルシユ陣営で困った事があれば〴〵オレ〴〵が手を貸すぜ」

「メ、メリオダス!？」

そんな話し聞いてないと言いたげな目でオレを見てくるスバル。

「まあもちろんエミリア陣営の都合を優先するけど。後これはエミリア陣営としてじゃなく、オレが個人的にする盟約だ」

といってもオレが出来ることなんて限られているけどな。今回みたいな討伐依頼なら大歓迎だ。それよりもスバルがずっとオレの方を見ているんだが、何かあったのか？

「ほら、スバル。後はお前の役目だろ？」

固まったまま動かないスバルの背中を力強く叩き激励を送る。

「ということとでクルシユ、俺達の言ってる事が的外れなら切り捨てて構わない。でも、俺達のお前の思惑がほんの少しでもかち合うなら一緒に白鯨を討伐しよう」

「一狩りいこうぜ！」

盟約を結ばんとクルシュの前に手を出す。

「・・・疑念も懸念も多く残る。即座に頷くのは難しい。だが卿らが此方の思惑を見抜いた事をそして・・・この目を信じる事にしよう」

差し伸べられたスバルの手を取る。それは盟約成立の証だった。そして緊張が解けたようにスバルは椅子に腰を下ろす。

「何度かひやひやさせられましたが何よりです。交渉前の約束は確かに」

「ああ助かったよラッセルさん。ミーティアはあんたに譲るよ」

二人のやり取りを見てしてやれらたなという表情で微笑むクルシュ。

「それにしてもメリオダスが何かしらの手助けをしてくれるのはありがたい。また何を討伐しに計画を企てるか分からんからな」

「自慢じゃないがうちのメリオダスは強えぞ？　もしかしたらあのラインハルトよりも強いんじゃないか・・・」

「すまん、さつきそのラインハルトに負けた」

「負けたのかよ！　てか戦ったのかよ!?　昼間の地震の原因はお前らか！」

スバルの絶叫はさておき白鯨討伐の準備は夜遅くまで続いていた。白鯨の出現時間を考えたら急いでもぎりぎりらしい。

皆各々準備を進めている中、オレは特にすることも無いので歩きながら何となく様子を見ていた。するとスバルもオレと一緒になのか作業する皆を眺めていた。

「よおスバル。寝なくていいのか？」

「メリオダスカ・・・ああ、皆準備してるのに俺だけ寝るのは申し訳なくてな」

「どうやら暇だから来たオレとは違ったみたいだ。」

「なあ、メリオダス・・・」

申し訳なさそうにスバルはオレの方を見る。

「悪かったな・・・俺、お前のごと少し勘違いしてた」

「なんの事かよくわかんねえけど、誤解が解けたならそれで良い」

スバルは力の抜けた笑い声で上げながら同意する。まるで安心したかのような……

「さあ、明日は白鯨討伐だ。さつきと寝ねえと寝坊しちまうぜ！スバルさんや？」

「おう、そうだな。と言いたいが、実はさつきから背中がヒリヒリしててな……」

背中に違和感を感じたスバルの服を捲ると、背中が赤くなって腫れ上がっていた。

「お前の背中赤くなってるぞ。どうしたんだ？」

「お前さつき背中叩いたからだよ!? あの時めっちゃ涙堪えながら喋ってたんだからな！」

「はははっ」

「笑って誤魔化してんじゃねえええ!!」

この後スバルはレムに治療してもらい、眠りについたらしい。

第42話

夕焼けの光がフリーユージェルの草原を照らす中、三大魔獣の内の一角《白鯨》を討伐すべく、クルシュ陣営とアナスタシア陣営の武装兵達が地竜やカララギで主流の騎乗動物《ライガー》を走らせる。

ーそしてエミリア陣営より、メリオダス、スバル、レムの三人が最前線で戦う事になった。

最初クルシュはメリオダスやレムなら兎も角、スバルが参戦する事に不安を抱いていたが、《魔女の残り香》によつて魔獣を惹き付ける性質を少し濁した形で説明し、納得してもらった。

スバルとレムはフェリスが用意した地竜に二人で乗っているが、メリオダスは定員オーバーで乗れず、他の地竜……ではなく、ライガーに乗っている。

その理由は単純、メリオダスがルグニカでは見かけないライガーに乗ってみたいとアナスタシアに頼んで貸してもらったからだ。

「よお、兄ちゃん。ライガーの乗り心地は最高やろオ！」

無駄に大声でメリオダスに話しかけて来た獣人の大男は、アナスタシア陣営の獣人傭兵集団《鉄の牙》団長、リカード・ウエルキンだ。

メリオダスと同じくライガーに乗っており、背中に大鉈を装備している。

「ああ！一匹欲しいくらいだ」

「せやろ？にしても、兄ちゃんみたいな坊主が最前線とはなあ」

「それ言ったらあつちに居るちびっ子はどうなんだ？」

容姿を伺うリカードにメリオダスはスバルと話している副団長のミニ・パールバトンとその弟のヘータローを指さす。

「ガッハッハッ！こりゃあ一本取られてもうたわ！」

そう言つてリカードは別の騎士の所に行つては白鯨討伐で緊張している体を解していた。

「このライガーといい喋り方といい、変わってんなあ」

因みにリカードやアナスタシアの喋り方はカララギ弁と言つてスバルの地元で言う関西弁に似た訛りらしく、西方の国カララギではこ

の訛りで話されているらしい。

(それにしても獣人ねえ・・・王都でもちらほら見かけたが、ブリタニアでは中々見かけなかったな)

メリオダスの元いた世界ブリタニアでは獣人は珍しい、しかしこの世界では普通に存在するらしい。

(そう言えば三十年以上前にブリタニアの何処かで獣人の狐ウエアフオックス男を発見したって噂を客から聞いたな)

しかしその客は当時相当酔っていたので信憑性は低く、尚且つ自分には関係無かったので軽く聞き流していたが、この世界で獣人が出て来た事でふと思いついた。

そんな事を考えていたら白鯨が出現するポイント《フリーユゲルの大樹》まで到着し、騎士達は戦闘準備に取り掛かる。

そんな中メリオダスは一人で座って水分補給をしていた。普段は明るく飄々としたメリオダスだが、今は少し暗くどこか思い詰めた様子だった。

「心ここに在らず、と言った様子だな。メリオダス」

「クルシュ。」

メリオダスの前に立っていたクルシュは普段着ている軍服の様な姿ではなく他の騎士と同様の鎧に身を包んでいる。

「今は白鯨に集中しろと言うのは卿にとっては酷な話か」

「力を貸すって言っというこの体たらくじゃ契約解消か？」

「気にするな。卿の強さには期待している。この白鯨戦において卿の力は必須だ。それに、卿の想い人のことはナツキ・スバルから多少聞き及んでいる」

「あんにやろ、後でデコピンだな」

死に戻りによって経験した知識だけでもエリザベスとメリオダスが互いにどういう感情を抱いているかスバルにはわかった。

「それはさておき、白鯨って美味しいのか？」

「ふむ・考えた事がなかったが・少なくとも私は食べようとは思わんな」

ふざけた質問に真面目に答えるクルシュ。もしもこの場にスバル

がいたならばそうはいかなかっただろう。

「よし、美味かったらへ豚の帽子亭の看板メニュー、不味かったらホークの残飯にしよう」

「へ豚の帽子亭？」

「ああ、俺が経営する酒場だ。白鯨討伐が終わったら打ち上げは是非うちの店でしてくれよな」

「ふっ…店の酒が無くなるまで飲み明かしてやるから覚悟しておけ」
「売り上げ楽しみにしてるぜ」

拳を前に突き出すメリオダスに合わせてクルシユも拳を差し出しグータッチを交わす。

(そっういえばここにホークママ居ないんだっただっ…まあいいか)

第43話

白鯨討伐の時間が来た。

スバル率いるエミリア陣営、クルシユ陣営、アナスタシア陣営の三部隊が整列する。

騎士達に緊張が走る中、軽快な音楽が流れる。これはスバルの携帯電話のアラームが鳴った音だ。

スバルの話しではこの音楽が、白鯨が来る時間を知らせるらしい。なのでクルシユの合図で騎士達は一気に警戒を強める。

しかし一分以上経っても何も起こらない。それどころか魔獣の気配一つしない。

次第にクルシユを含めた騎士達が一瞬気を緩める。その中でもスバル、レムは警戒を怠らない。メリオダスはいつも通りの様子でライガーに騎乗し戯れていた。

「・・・来たか」

いち早く気配に気づいたのはライガーと戯れていたメリオダスだった。

月明かりに照らされていた草原に影が落ちて、漸くクルシユも気づいたようで、空を見上げて息を飲む。

白鯨の襲来だ。

騎士、傭兵団の全員がその事を把握すると、たじろきながらもクルシユの方へ目を向ける。攻撃命令を待っていたのだ。

気後れしながらもクルシユは先制攻撃の指示を出そうとした。その言葉は破裂音によって遮られた。

メリオダスが上空へ飛び上がり、白鯨へ蹴りを一撃浴びせる。

それと同時のタイミングで、

「ぶちかませええッ!!」

「イーアル・ヒューマ!!」

「エンチャントイー呪符・獄炎!!」

魔法の詠唱とともにレムは高度に練り上げた氷柱を四つ創り出し、メリオダスは蹴りを繰り出した後、白鯨を踏み台に更に上空へ飛び、

高密度の魔力によって創り出した獄炎をロストヴエインに付随させ、二人同時に白鯨へぶつける。

白鯨の絶叫とともにスバルは先制攻撃が成功した事に対してガッツポーズを取る。

その様子を見ていたクルシユは動揺しつつも笑いを堪えずにはいられなかった。

「ー総員、あの馬鹿どもに続けッ!!」

その言葉の後に討伐隊は雄叫びを上げて白鯨に突撃する。アナスタシア陣営の騎士達は魔道具を起動させる。

各所に設置した魔道具にマナを注ぎ込み、一気に白鯨へぶっぱなした。

全弾着弾し派手に大爆発を起こすが、実際に白鯨には大して効いていなかった。

しかしそんな事は関係ない。とにかく撃って撃って撃ちまくる。

「作戦通りとは言え、本当に遠慮なく撃つてくるとはな」

爆風によって吹き飛ばされたメリオダスは、借りたライガーによって空中で助けられた。

「ナイスキャッチー」

そう言つて戦線に復帰する為にライガーを走らせる。

直後、闇払いの結晶が打ち上がり花火の様に爆発した。途端に辺りが昼間のように明るくなっていった。

『闇払いの結晶石』は砕くと薄闇を照らす僅かな輝き程度の擬似光源が発生する。

しかし今回使用された結晶は数が多かった。僅かな光でも合わせれば擬似的な太陽も作り出せるらしい。

それによって闇に隠れていた白鯨が姿を現す。

その大きさは50mに迫り、巨大化を使用したフラウドリンと双壁フルサイズをなすほどだ。

そんな白鯨が巨大な口を開けて咆哮。轟音が鳴り響き、地面が軋む。遠く離れたメリオダスが顔を顰めるほどの騒音だ。

咆哮が止むとスバル、レムを乗せた地竜が白鯨の懐に駆け出す。そ

の二人を追い掛けようとして身を翻した瞬間、白鯨の頭部に見えない斬撃が当たり血噴き出しながら蹴く。

「あれが射程を無視した無形の剣、百人一太刀の剣技か。噂で聞いた通り珍しい技だな」

クルシユの剣技も凄いが、特筆すべきはヴィルヘルムの剣技だ。

両手に握られた剣を振るい、白鯨の身体を切り刻みドス黒い血を噴き出しながら駆け回る。

その剣技はメリオダスが感心する程で、まさに『剣鬼』の名に恥じぬ戦いぶりだった。

ヴィルヘルムに続き、リカード率いる傭兵団による物理攻撃の後、間髪入れず先程と同様の魔法攻撃を放つ。

ここまで白鯨は文字通り手も足も出ない状態で大ダメージを与えた。

「あんだけの攻撃を受けて平然としてやがる」

白鯨はこの猛攻にも高度を落とす事なく余裕で耐えていた。

直ぐにヴィルヘルムやリカードが追撃を加える。遠目で見えづらかったが白鯨から何かが落ちた。

あれは肉片・・・いや、眼球だ。

抉り取られた眼球の上にヴィルヘルムが着地し、剣を突き刺し白鯨に見せびらかす様に持ち上げる。

直後、メリオダスは白鯨が次に取る行動を察知し、乗っていたライガーの耳を塞ぐ。

残った白鯨の眼球が赤く染まり、咆哮を上げる。先程とは違い今度のは金切り声の様な咆哮で、黒板を爪で引っ掻いた様な不快感を与える。

耳を塞いでいた筈のライガーも思わず足が止まる。聴覚よりも精神に直接脅しかけて来たように足がすくんでいた。

そして白鯨の全身から霧が放出され、瞬く間に草原や太陽の光を飲み込む。

スバル達にとってそこはもう真っ白な霧の世界だ。

「こりゃ早く行かねえとやべえな」

止まっていたライガールの足も次第に動き出す。まるでメリオダスと同じく「仲間の元に早く向かわなければ」と言っているようだった。

「頼んだぜ、ホーク2号!」

メリオダスの意志を汲み取ったかのように、ライガール改めホーク2号は更にスピードを上げて霧の世界へ飛び込んだ。

第44話

霧の世界に飛び込んだメリオダスは、ただ一直線にスバル達の下へホーク2号の走らせる。

しかし勢い良く飛び込んだのは良いものの、辺り一面真っ白な霧の中ではスバル達の姿は疎か、白鯨の位置を確認できない。

しかも周りから騎士達や傭兵達の叫び声が聞こえてくるので正確な位置も特定できずにいる。

「ーッ！」

突如メリオダスの前方から霧が迫って来て、地面を抉りながら突進して来る。

それをホーク2号の機転によりギリギリで回避する。

「危ねえ。良い動きだぞ、ホーク2号！」

嬉しかったのか、ホーク2号は返事をするように小さく吠える。

ひたすら走り続けていても埒が明かないと判断し、一度止まり周囲を見渡し音を聞く。

しかし当然の如く何も聞こえず、何も見えない。

「うむ、早いところあいつらと合流をー」

メリオダスの言葉を遮り、またもや白鯨が咆哮を上げる。

悲鳴を上げながら地面にのたうち回るホーク2号に対して、メリオダスは平気な顔をしていた。尤も一般人なら耳を塞ぎ動けなくなっていただろうが。

メリオダスにとつてこの咆哮はうるさい事には変わりないが、寧ろ先程よりも声量が少ないようにも聞こえていた。

にもかかわらずホーク2号にこれだけのダメージを与えたのは、先程の咆哮による精神攻撃よりも数倍強力な精神汚染だったからだ。

「これは気力によるものなのか、それとも元々の耐性が関係してんのか・・・」

そんな事を考えていると、今だにのたうち回っているホーク2号に目を向ける。

「仕方ねえ・・・許せよ」

吐瀉物を吐き散らしながらもがき苦しむ姿を見ていられなくなつたメリオダスは、手刀でホーク2号を気絶させて岩の陰まで運ぶ。

「後は任せろー!」

それだけを言い残し、メリオダスは一人駆け出して行った。

ホーク2号からかなり離れた場所で立ち止まり、意識を集中させ極限まで研ぎ澄ませる。

すると南東から何かが移動する気配に気づく。しかもその大きさはまるで大木の様だった。

つまりー

「そこだッ!」

メリオダスの飛び後ろ回し蹴りが白鯨の横腹に炸裂し、白鯨は地面に転がりそのまま霧の中にフェードアウトする。

「メリオダスッ!!」

そこに居たのは地竜に乗ったスバルとレムだった。

「お前らが引き付けてくれたおかげで漸く合流出来たぜ。ナイスデコイ!」

「褒めるかデイスるかどっちかにしろお!」

いつものやり取りが出来るといふ事は、スバルにもそれだけまだ余裕があったようだ。

「ッ! メリオダス君、スバル君、来ます!!」

襲いかかって来る白鯨に斬りかかろうとメリオダスはロストヴェインに手をかけるが、その前にヴィルヘルムが白鯨に飛び移り、頭上に剣を突き立てる。

「お姉ちゃん、合わせて!」

「わああー!!」

ヴィルヘルムが白鯨から離れたと同時に見た目が愛らしい獣人の姉弟、ミミとヘータローが大口を開けて空気弾の様なものを発射し、ヴィルヘルムが傷つけた部位を更に抉る。

「团长お!!」

「おう! 任せときい!!」

続けてリカードが白鯨の身体にライガーで駆け回り、霧が噴出して

いる部位を大ナタで斬り潰す。

「メリオダス！ ウルガルの時みたいな『闇の痣』は使えねえのか？」

「使えるっちゃ使えるが、この状況じゃ意味ねえな」

メリオダスが魔神化した状態の本気は正に天変地異そのもの、なので並の騎士、ましてやスバルが生き残れる可能性はゼロだ。

対して白鯨の防御力だけに関しては何戒に匹敵する。

つまり仮に魔神の力を使用しても、白鯨を倒す程の火力が出せないという事だ。

「とにかく俺達は白鯨を引きつけるぞ！ レム！」

「はいー！」

スバルが合図するとレムは地竜を走らせ、魔女の臭いを漂わせたスバルと白鯨の鼻先を駆け回る。

スバルの目論見通り、白鯨はスバルを狙って大口を開けて飲む込もうとする。

それをメリオダスは素手で、ヴィルヘルムは剣で、リカードは大ナタでそれぞれ同時に攻撃し白鯨を地面に叩き落とす。

メリオダスが白鯨の頭上に着地すると、返り血まみれのリカードが楽しげな笑顔でやって来た。

「坊主、大した暴れっぷりやなあ！」

「あの爺さん程じゃねえさ」

メリオダスは後ろで一心不乱に剣を振るうヴィルヘルムを親指で指す。

「ヴィルヘルム・ヴァン・アストレア・・・噂以上の男や」

「ああ。こりや早く決着が着きそうだな」

「せやな。思ったより頑丈やけど、強さ自体は大したことないわ！」

「いや、少々手応えが無さ過ぎる」

二人が感心しているとヴィルヘルムが白鯨に刺した剣を踏み台に、メリオダス達の下に着地する。

「この程度の魔獣に妻が・・・剣聖が遅れを取ったとは考え難い。先手を制せたことや、最初の時点の霧で分断されなかったことを考慮して

も・・・」

ヴイルヘルムが考察している最中、突然白鯨が一気に高度を上げて空へ上昇する。

それによつて三人は落下し、ヴイルヘルムは落下の途中で白鯨の背鰭の一つを根元から削ぎ落とす。

「坊主!!」

落下するメリオダスの背後で大ナタを構えるリカード。

その呼び掛けで意図を察したメリオダスは、大ナタに着地し、リカードはメリオダスの乗った大ナタを思いつきりフルスイングする。

「行ってこいやああ!!」

大砲の様に発射されたメリオダスは、勢いが良すぎたのか上昇する白鯨の目の前まで飛んで行ってしまい、白鯨は上昇する過程で大口を開けてメリオダスを飲み込んでしまう。

「あ・・・あかん!」

「やってしまったああ」と叫びながら落下して行くリカードは、ライガーに拾われて地面に着地する。

第45話

リカードのコントロールミスによって白鯨に飲み込まれてしまったメリオダスは暗闇の世界にいた。

地面は熱くヌメリがあり、不規則に脈を打っている。

ここは白鯨の体内だと確信する。

「真つ白な世界の次は真つ暗な世界か」

辺りを見回しても当然何も見えない。

白鯨討伐戦が開始されてから視界が悪くなってばかりなのはさておき、メリオダスはどうか灯りを見つけようと考えてる。

思いついた対処法は、掌に直径三〇cm程の獄炎の球を創り出しそれを松明代わりにすることだった。

「まあ、ねえよりマシだな」

獄炎の黒い炎は攻撃に長けているのであって、松明代わりに使うことは想定されていない。その為、足元を照らす程度の光力しかなかった。

こういう時に七つの大罪メンバーの一人、キングの神器って便利だとメリオダスは改めて思った。

「とりあえず、白鯨の口に向かって行けば外に出れそうだが・・・口つてどつちだ？」

足元を照らす光だけを頼りに内臓の壁を伝い適当に歩いていると、メリオダスには見えていないが少し広い場所に出た。

「・・・ん？」

周りに違和感を感じたメリオダスは広場の中央辺りまで歩く。

「ーッー！」

次の瞬間、メリオダスに向かって何かが高速で飛んで来る。

暗闇で、しかもここは白鯨の体内という事もあり、油断していたメリオダスはその攻撃を避けられなかった。

しかし正確にはメリオダスではなく、メリオダスの掌にある獄炎の球を狙って攻撃していた。

何者かの狙い通り獄炎の光は消え、完全にこの空間は闇に包まれて

いた。

「・・・まさか、オレ以外にも誰かいたとはな」

白鯨はこれだけの大きさだ。食べた動物や魔獣を一々咀嚼して飲み込むほどマメな魔獣には見えない。

なので生きてままだ飲み込まれた魔獣がいたとしても何ら不思議ではない。

メリオダスが周りを警戒すると、四方向から攻撃が来る。それを全て紙一重で防ぎ、反撃に移るとすぐさま離脱する。

「どうやら一匹だけじゃなさそうだな」

しかもこの魔獣は全て暗闇での戦闘に長けている。

白鯨の体内で何年、或いは何十年、お互い仲間も他の魔獣も関係なく殺し合い、喰らい合いながら生きて行かなければいけない弱肉強食の世界だ。

そのため気配、音、殺気を殺し攻撃する事など容易い。まるで熟練された暗殺者だ。

この劣悪な環境で生き残ってきた先鋭達にとって新入りなどただの餌。その餌が無くなり腹が減ればまた互いに殺し合うだろう。

しかし幾ら地の利があるとは言え、メリオダスの戦闘経験は奴らの数千倍はある。

「ほッー」

四方から来る魔獣の攻撃をメリオダスは勘だけで捌き、ついに反撃をする事に成功した。

「浅いな・・・」

攻撃は通ったが浅い、これでは何年続けても倒せない。

この局面を打開するために策を考えるが、魔獣はその隙を与えてくれない。

攻撃を躲しているうちにメリオダスは背後に壁を感じたが、構わず魔獣はメリオダスに襲いかかって来る。

追い詰められてしまった。

「なんてな」

攻撃をジャンプで避けて壁を蹴り、ロストヴェインを抜いて魔獣の

背後の広場に向かって

「神千斬り！」

神千斬りによって広範囲に獄炎を撒き散らし広場を炎で埋め尽くす。

そして炎によって魔獣の姿が照らし出される。

「ギギイ……」

魔獣は全員で五体。それぞれ種族は違うだろうが、視力が退化しているのは間違えないようだ。

「さてさてさーて、今度はお前らが追い詰められたようだが……こつからどうする？」

余裕の笑みを浮かべて炎とメリオダスに追い詰められた魔獣達には既に戦意は無く大人しくし死を待っていた。

自分達とメリオダス戦力差を既に察していた。地の利を生かしても勝てなかった相手だ、ハンデ無しでは到底敵わない。

今まで散々仲間を殺しまくった魔獣達は「次は自分の番か」と悟った。

「……」

メリオダスはロストヴェインを構えて力を入れー

「はあああ……!!!」

ー斬る。

しかし魔獣達は五体無傷、背後に風を感じた魔獣達は思わず振り返る。視力が退化し、ほぼ盲目状態だが分かった。

(この穴は外へと続いているッ！)

困惑する魔獣達を横切りメリオダスは斬り空けた穴を覗き込む。

「お、意外と近くて良かった！」

意気揚々と外へ向かうメリオダスに疑問を投げかけるように魔獣の内一人が立ち上がる。

それに気づいたメリオダスは振り返りいつものように微笑む。

「お前らに罪はねえ……」

それだけ言い残して飛び降りる。

ここへ残るか、外へ出るかは自分次第、なのでこの後魔獣達がどんな選択をしたかはメリオダスの知るところではなかった。

メリオダスは落下の途中で「最初からこうしておけば良かった」と若干後悔していた。

第46話

白鯨の体内から脱出したメリオダスはそのまま地上へ着地する。

そこには丁度スバル、レム、クルシユが合流していた。

「メリオダス、お前はやっぱり無事だったか！」

スバルは白鯨に飲み込まれて尚メリオダスを忘れる人物はいなかった事から、霧によって消されてはいない、ならば生きていると信じていた。

「オレがいねえうちに、随分と状況が変わったみたいだな」

「ああ、ヴィルヘルムさんまで飲み込まれて、何とか脱出したんだがダメージがでかくて今治療してもらってる。それに・・・」

「白鯨が三体・・・どうしたもんか」

空を見上げると白鯨が三体に増えていた。

これは白鯨が三体に分裂した姿だ。その代わりに一体ずつはパウダウンしているようで、そこにはスバル達も薄々気がついていたようだ。

前回のループで殲滅状態のメリオダスがさりげなく言った「白鯨の分身体」という発言でスバルは確信した。

「スバル、お前なら何か作戦があるんだろ？」

「ああ、今あのデカブツを倒す作戦を思いついた。俺がさつき考えていたのよりもっと確実な作戦をな！」

さつき思いついた作戦とはスバルが一番高い位置にいる白鯨、つまり本体までレムの繰り出す氷柱にしがみつき、白鯨の体まで運んでもらう。

それから飛び降りてスバル特有の『魔女の残り香』で下に誘導する。

落下するスバルをレムがキャッチして愛竜のパトラッシュを走らせ、白鯨をフリーゲルの大樹まで誘き寄せ、クルシユの剣技で切込みを入れ、討伐隊の魔法攻撃で大樹をなぎ倒す。

そして大樹で白鯨を押し潰す。と言うのがスバルの考えた作戦だ。

しかしこの作戦は運頼りなところもある為、失敗する可能性が高い。

メリオダスがいなければ最善の一手とも呼べたであろうが、今はメリオダスがいる。

それを利用しない手はない。

「ー」という事で、後は手筈通り頼むぜ！」

「了解！」

スバルから作戦を聞いたメリオダスは白鯨の分身目掛けて飛び上がる。その瞬間、クルシュやレム、討伐隊が霧払いの魔晶石を叩き割り視界が一気に晴れた。

メリオダスが分身体に乗ると、それを踏み台にもう一度思いきりジャンプする。

勢い良く上昇していき、遂に白鯨本体を追い越し、月を背景に拳を振り上げメリオダスは魔力を集中させる。

「はあああああ!!!」

メリオダスの額に黒い痣が展開され、一気に殺気が増した。

それに気づいた白鯨は回避行動を取るがもう遅い。

地上から遙か上空、ここならばどれだけ本気を出しても巻き込まれる者はいない為、遠慮無くその一撃を放つ。

振り下ろされた拳は白鯨の背中に直撃し、霧が晴れて見えるようになったフリユージェルの大樹に白鯨を叩き落とす。

後はクルシュ等が大樹を切り倒して白鯨を押し潰す。驚いた事に白鯨まだ生きていた。

そんな白鯨の前に一人の男が剣を手に立つ。

落下しながら魔神化を解除したメリオダスは笑みを浮かべる。

「後は任せませ、ヴィルヘルム・ヴァン・アストレア」

雄叫びを上げながら白鯨を滅多切りにするヴィルヘルム。

治療魔法をかけたとは言え、重傷なのは変わらない筈だ。

しかしそんな満身創痍の体でも剣を振るう力強さ、気迫は変わらな
いどころか増し続けている。

大樹の下敷きになり、もはや抵抗出来ない白鯢が血を撒き散らしながらもがき苦しむ。そんな姿を見てもヴィルヘルムの剣は止まらな
い。

その姿をスバル、レム、クルシユ、それだけでは無い、この場に
いる全ての討伐隊が黙って見守る。

白鯨の片目に自身の姿を移し、白鯨も又その剣鬼の姿を見る。
最後の一太刀が繰り出される時、メリオダスが静かに地上に降り立
つ。

「眠れ。永久にー」

振り下ろされた剣を最後に白鯨はその瞳を閉じた。

白鯨の分身体も消滅し、完全に決着が着いた。

白鯨の頭上に立ち、地平線の彼方を見詰めるヴィルヘルムは今どの
ような気持ちか、それは本人にしか分からない。

「ーに白鯨は沈んだ」

静寂の中、クルシユ・カルステンが地竜を歩かせ前へ出る。

「四百年の歳月を生き、世界を脅かしてきた霧の魔獣は・・・ヴィルヘ
ルム・ヴァン・アストレアが、討ち取ったり!!」

この言葉と共に討伐隊は歓声を上げる。白鯨から勝利をもぎ取っ
た騎士達は互いに抱き合い、讃え合う。

「数百年も続いた戦いが遂に決着、か・・・オレも、オレ達の戦いも終
わらせねえとなーエリザベス」

メリオダスはらしくない表情で一人、歓喜の声を上げる騎士達を見
ながらぽつりと呟くが、その様子に気づく者はいなかった。

第47話

白鯨討伐戦に勝利を収め歓喜の声を上げる中、ある用事を思い出したメリオダスはその場を離れようとした。

「何処へ行くんだ？　メリオダス。卿無くしてはこの白鯨討伐は成しえなかったのだ。共に祝おうじゃないか」

「なあに、直ぐに戻るさ。それにオレがいなくてもきつと勝てただろうぜ。スバルやレム、クルシユ、ヴィルヘルム、そして討伐隊皆の力を合わせればこの程度の困難屁でもねえ」

「そう謙遜するな。無論、私も卿だけの力で勝ったとは思っていない。これは皆の協力と尊い犠牲があつて勝ち取った勝利だ。しかし、卿の貢献も凄まじかつた、それも事実だ」

先程まで気が緩んでいたクルシユは、突然真剣な眼差しでメリオダスを見据える。

「そんじゃその言葉、素直に受け取っておくぜ。だけどこの後がスバルの本命だろうから、浮かれんのも程々にな」

「この白鯨討伐が前座扱いとは恐れ入る」

「疲れたんなら帰って寝ても良いんだぜ？」

「冗談はよせ。借りたまま返さず帰還する様な恥知らずではありたくない。手を貸そう」

軽口を叩くメリオダスに冗談混じりに微笑む。どうやらクルシユもメリオダスという男がどう言う人物か理解してきたようだ。

「本当に頼もしい女だ。まあ、その話しはスバルとしてくれ」

そう言ったメリオダスはクルシユに背を向けて歩き出すと、クルシユはその背中を見ながらぼつりと一言呟く。

「全く・・・計り知れん男だ」

「確かこの辺だったな」

ここは大樹から遠く離れた場所で、辛うじて倒された白鯨が見える

位置にメリオダスはいた。

「お、いたいた。迎えに来たぜ。ホーク二号」

メリオダスが近づいた岩陰には今だ眠り続けているホーク二号の姿があった。

討伐前は呼吸が荒く魘されていたが、今は呼吸は落ち着いており気持ち良さげに眠っている。

その様子にメリオダスは一安心する。

「よし。今仲間の所に連れてってやるからな」

眠っているホーク二号を優しく抱きかかえ、朝日の光に照らされながら白鯨の亡骸を目印に歩き出す。

メリオダスが戻る頃には皆の浮かれ気分はすっかり冷めており、死傷者の対応に追われる者や『勝利の証』として白鯨の頭を切り取りどうにか運び出そうと奮闘する者がちらほら見えた。

「坊主、さつきはすまんかったのオ。力入りすぎてもうた！」

戻って来たメリオダスの後ろから、相変わらずデカイ声で話しかけて来たのでメリオダスは少し驚きながら振り向く。

そこには身体に包帯を巻いたりリカードが立っていた。

治療を受けたとはいえ完治しているわけではなく、フェリス以外の治療魔法はあくまでも応急処置程度の効力のようなのだ。

「気にすんな。見かけ通りすげえパワーだったぜ」

謝るリカードにメリオダスは親指を立てて慰める。しかしリカードは「パワー」という単語に首を傾げる。

この世界の人はスバルの故郷で言う横文字に疎い様だ。

「よオわからんけど、そう言うてくれるとワイも助かるわ。まさか白鯨の腹ん中入って無傷とはなア。まあワイは生きとると信じとったけどなア」

「そんなこと言っただんちよー。あのおにーさんになんて言おうとつて呟いてたじゃんかー！」

リカードの脚からミミがびよこつと顔を出す。

「それを言うなやア!!」

リカードが大腕を上げて怒声を放つと、ミミは無邪気に笑いながら

逃げて行く。

ジト目でリカードを見つめるメリオダスに気づいて、一旦咳払いして仕切り直す。

「まあ何にせよ。坊主が無事で安心したわ……って、そのライガー」
メリオダスが抱えているホーク二号に、リカードはふと目が行く。
「ん？ ああ、こいつには世話になったからな。死なすわけにはいかねえよ」

「そうかい。坊主みたいな男に乗ってもらえてそいつも幸せやろな」

「お互い様さ」

ライガーとは良き相棒であり、友であり、家族であるリカードの言葉は慈愛に満ちていた。

「さあ、さっさとそいつを治療して来いや。平気そうとは言うても白鯨の精神攻撃をまともに受けたんや、何らかの障害が残るかもしれない」

「言われるまでもねえさ」

その言葉でリカードに大きな口で笑い、手を振りながら去って行った。

—————

白鯨戦での消耗が予想以上に激しく半数の人員が王都へ帰還する事になった。それはレムも例外ではなく、既に竜車の乗っていた。

メリオダスとヴィルヘルムが白鯨に飲み込まれた後、その穴を埋めるかのように凄まじい奮闘を見せていた為、最早ともに戦える体ではなかった。

「スバル、大丈夫か？」

メリオダスがスバルの不安を悟る。

帰還するメンバーはクルシュ、レム、ヘータローと討伐隊の半数でかなり戦力はダウンしてしまったことにスバルは若干の不安を抱いていた。

しかしヴィルヘルムやリカード達、そして何よりメリオダスがいる

ことも事実、メリオダス以外は負傷しているとは言え、これ程頼りになる戦士はそう居ない。

スバルの不安は他にあった。

「正直、不安はある。もちろんお前らの力を信用しているが・・・一つ気がかりがあつてな・・・」

以前のループで見たメリオダスの”あの状態” どのような条件であの姿に変貌するのかが分からなかった。

ただ敵か味方の判別は出来ない。ペテルギウスを殺したのもメリオダスで、パツクにもとどめを刺さなかった。何よりスバルに対しては殺意が無いようにも見えた。

しかし安易にその件についてメリオダスに言及することも怖くて出来ずにいた。

「・・・考えていても仕方ねえ。今はとにかく魔女教だ」

スバルはこの問題を後回しにする。

「その意気だ。こっちはお前の作戦だより、お前次第で生き死にが決まるんだ。期待してるぜ！」

「これからつて時にプレツシャールかけんな！」

こんな冗談を言うやつが実は敵だなんて信じたくはなかった、というスバルの願望もそこにはあった。

しばらくするとアナスタシア陣営の傭兵団『鉄の牙』そのもう半分が近づいてくる。

実は白鯨戦では傭兵団の半分しかいなかった。

もう半分は他の人間が戦いに巻き込まれることを防ぐ為に、街道の封鎖という任務に当たっていたのだ。

因みにその傭兵団のリーダーはミミの弟、デイビーだ。

だんだん近づくにつれて傭兵団の中に一人、地竜に乗る物がある事に気づき、スバルは顔を曇らせる。

その人物とはアナスタシアの騎士、ユリウス・ユークリウス、スバルの因縁の相手だ。